
必殺仕事人 in ヴォルケンリッター

酔仙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

必殺仕事人 in ヴォルケンリッター

【Nコード】

N7128L

【作者名】

酔仙

【あらすじ】

はやて他6名が必殺仕事人を始めました。
一体何故彼らは仕事人を始めたのか？
そして、ついにその正体を現す巨悪にどう立ち向かうのか？

プロローグ（前書き）

この小説は、Arcadia に投稿した物を二重投稿しています。
向こうのサイトに投稿した物を少し手直ししています。

また少し改変している箇所もありますので、その辺も含めて読んで
いただけると良いかと思えます。

なるべく多くの皆様に読んで頂けると幸いです。

誤字、脱字、表現がおかしかったりする所も、随分あると思いま
す。

ご指摘頂けると、非常にありがたいです。

さて、今回の設定は、ヴォルケンリッターの6名を必殺仕事人に
したらどうなるか？です。

時間軸としては、STS後のことです。

闇の元締めは、八神はやて、中村主水ぼくシグナム、念仏の鉄み
たくザフィーラ、三味線屋勇次のごとくシャマル、

鍛冶屋の政のようにヴィータが悪い奴らを徹底的に殺します。

オリキャラは、掃いて捨てるほど出てきますが、基本的に殺され
ます。

ブローグ

ブローグ

「ゆ、許してくれ！か、金ならいくらでも出すから！な！」

「いくら金を積まれた所で、死んだ人間は生き返っては来ない」

ドシュッ

「ぐっ、がつ」

「あら、ぶら下げただけじゃあ簡単には死なないのね、お逝きなさい」

女の白い指が、ワイヤーを「ヴン」と弾く。

瞬間、釣り上げられた男は、ガクンと脱力して息を引き取った。

「お前みたいな奴が居るから、悲しむ人間が増えるんだ」

ドカツ

「言い訳なら地獄でするんだな」

ボキッ

「おい、また出たんだってよ、例の殺人犯」

「今月にはいつて3件目か？」

「どおやら、同じグループの作業らしいが、凄いやな」

「悪徳政治家に、不良管理局員、ヤクザまで、どいつもこいつも、かなり酷いことをやってた奴らばかりらしいぜ」

「天誅ってか？」

「あれだけガードの堅い奴らを、あっさりと殺すなんて事は、普通出来ないだろう」

「殺し方も、普通じゃあないしな」

今回4人死んだ中では、大型の刃物で斬られた者、細いワイヤーの様な物で絞められた者、四角い杭の様な物で頭を貫かれた者、首を折られた者、いずれもこの所続いている殺しと手口は同じだった。

そして、殺されたのは、いずれも犯罪の容疑が掛けられていながら、証拠不十分で逮捕されていない連中ばかりだ。

そして、クラナガンにはいつからか、晴らせぬ恨みを金で晴らしてくれる「必殺仕事人」伝説がまことしやかに囁かれる様になった。

「ふあゝ眠いな」

昼食を取りながら、生欠伸をしていたのはシグナムだった。
夕べはあまり寝る時間がなかった様だ。

ここは、首都防衛隊航空武装隊の詰め所である。

「夕べは、ご苦労やったな」

「主、ここではその話はしないで下さい、誰かに聞かれたら事です」
最近は大きな事件もなく、出勤もほとんど無い為、昼行灯を貪る二人であった。

作：次回からお仕事です

プロローグ（後書き）

この作品は、Arcadia では既に完結していますが、
改変やエピソードの追加があるかも知れません。

女子大生レイプ殺人事件（前書き）

不良警官達に、はやての怒りが爆発する。

女子大生レイプ殺人事件

その日、クラナガン南部の港の一角で、若い女性の死体が上がった。

ギンガ・ナカジマ捜査官が遺体の検分と現場検証をしている。

遺体は何も着用しておらず、付近に手掛かりとなる様な遺留品は一切発見されなかった。

「どおや、ちょっと見せてえな」

シートをめくって遺体を確認したのは、八神はやて特別捜査官だった。

「こりゃ酷いなあ」

「ええ、全身に殴打痕、頭への一撃が致命傷となったようです」

「レイプして、その後殴って殺した……って所か、こう言うのは、なかなか捕まらんよ」

「この人手不足では捜査は後回し、迷宮入りでしょうね？
それにこの辺りは潮の流れが複雑で、どこで遺体を捨てたかも特定は困難でしょう？」

「後は検視待ちか……」

JS事件から1年ちよつと、管理局は人事と内部組織の立て直しで、とても一介の殺人事件に人手を割けるほどの余裕はなかった。それを良いことに、犯罪者が増加し、迷宮入りする事件も後を絶たないでいた。

そんな折、犯罪者達が次々と殺される事件が発生し、何時しか仕事人伝説が囁かれ、犯罪者は減っていった。仕事人が犯罪の抑制になっていたのである。

元々、ミッドチルダに「仕事人」という言葉はなかった。あるネット番組が放送されるまでは……

97番世界特集の中で、ドラマ「必殺仕事人」は放送されていた。あり得ない方法と技で、次々と悪人達を葬っていく殺し屋達、そしてその美学がコアなヲタク達の心に火を付けた。

そこへ来て、全く同じやり方で、次々と犯罪者が殺されたのである。

アレは、97番世界から本当に仕事人を呼んだのだとか、誰かかなり鍛えたヲタクが真似しているとか、掲示板は、毎日の様に大盛況だった。

ミッドチルダに、何時しか「仕事人」という言葉が定着していた。

その日、地上本部、50名近い幹部が集まり会議をしていた。議題は「仕事人」対策である。

局員も何人が殺された、このまま放置することは出来ないとのこ

とであつた。

しかし、会議は思う様には進まなかつた。

どうしても、仕事を始末したい側の人間と、このまま放置して様子を見ようという人間とに別れたのである。

結局会議は、レティ提督の一言で決まつた。

「殺されたのは犯罪を犯していた局員ばかりだ、

我々が取り締まらねばならない所を代行して貰えたのだから感謝してもいい位じゃないのか？」

これには誰も反論出来なかつた。

結局、仕事人問題は当分の間先送りされることになったのである。

「シャマル、検視の結果はどうやつた？」

「被害者は17才、クラナガン大学の学生よ、

家族は母親と二人暮らし、父親は本部襲撃事件の時死亡した武装局員よ」

母親のことを考えると、とてもいたたまれない気持ちになる。

「酷い物ね、胎内から5人分の体液が検出されているわ、

散々犯した揚げ句に、1時間以上殴つて殺されたみたい、とても人のやる事じゃあないわ」

そう言つて一粒涙をこぼしたその目には、凄まじいまでの怒りが

見て取れた。

「シャマル、その怒りは仕事までとつときい、このヤマは必ず仕事になる」

はやての一言に、更に険しい顔になるシャマルだった。

「実は、同様のレイプ事件がこの半年で11件起きています。

内二人は、DNAが今回の事件とも一致しますし、全ての事件に共通しています。

残り3人は3つのグループに分けられます」

「なるほどなあ、主犯格二人に手下が9人か？厄介やなあ？犯行グループの犯罪履歴は？」

「データバンクには、該当するDNAデータはありませんでした。まだ一度も捕まっては居ないようです」

「ほうか？なら早いこと始末して、これ以上被害者を出さんようにせなあかなあ」

ギンガと二人、事件を捜査するはやて、しかし、そこに横槍が入る。

この事件は、該当地区の所轄に任せると言うのだ。
該当地区は、第8警防署の所轄であり、自分たちの縄張りに入ってくるなど言うのだ。

当然、衝突が起きる。

結局、お互い協力のないまま捜査をすることとなったが、どうにも所轄からの妨害が酷い。

はやては、この妨害の酷さに、違和感を感じ始めていた。

「あーあ、今日も収穫無しか？」

家路に就く道すがら、公園を抜けようと歩いていた時のことだった。

林の奥で、首を吊ろうとする女性を見つけた。

慌てて止めにはいる。

「おばさん、何してるの？死んだらあかんで」

よく見れば、あの女子大生の母親だった。

話を聞くと、警察は当てにならない、事件の捜査を頼みに言っても門前払いされてしまい話にならない。

自分ではもうどうしようもなく、生きる希望さえ失ってしまったのだとさめざめ泣きながらそう話してくれた。

「おばさん、心配せんでもええよ、私が一人でも捜査するから」

「えっ、あなたは？」

そう聞かれてはやては答えた。

「特別捜査官の八神はやて言います、私はあなたみたいな弱い人の

味方です、

絶対に犯人はこの手で捕まえて見せますので、心配しないで下さい」

「でも、もし、私が頼りないなら、一つだけ裏技を教えておきます。あそこに見える港、あの向こうの海岸をずっと西に歩いた先にある小さな岬の突端に、

ビリケンさん言う銅像があるそうです。

そのビリケンさんにお金を供えてお願いすると、

仕事人が悪い奴らを成敗してくれるのだとか言う話です」

そして、なんとかおばさんを宥めて分かれたはやてだった。

翌日、意外な人物から連絡が来る。

アコース査察官からだった。

「おはようロツサ、何の用？真面目に仕事してる？」

「してるとも、だから連絡したんじゃないか？」

「ってことは何か情報を掴んだの？」

「ああ、実はあの検視の後で、あの子の頭の中にあつた情報の断片を引っ張り出すことに成功してね、

画像が出来たから今から送る」

送られてきた画像には、意外な人物が写っていた。

「ありがとうな、ロッサ、これで疑惑が確信に変わったわ」

そこに写っていた人物、ジョニー・マクシミリガン第8警防署の署長、他には捜査を妨害してきた二人の刑事、何人かの若い男達。これだけあれば充分だった。

でも、これだけでは証拠にはならない。

情報の出元がヴェロッサであることや、どうやって情報を引き出したかは、明らかに出来ないからだ。

取り敢えず、犯人が特定出来た旨の報告をあの母親にする為に、彼女の自宅に向かう。

途中で、あの二人の刑事とすれ違った。

イヤな予感がこみ上げてくる。

こういう時のイヤな予感ほど良く当たる物だ、でも、心の底から当たって欲しくないと、そう願わずにいらなかった。

彼女は、部屋の中で滅多刺しにされていた、それでも、はやてが来た時にはまだ息があった。

「……お……願い……こ……これで……仕事人……」

それが、彼女の最期の言葉だった。

凄まじい怒りがこみ上げてくる、自分がもう少し早く到着していれば、あるいは彼女を救えたかも知れない。

彼女に再び笑顔を取り戻させることは、もう敵わなかった。

託されたのは駅のコインロッカーの鍵だった。

中には手紙と、札束が入っていた。

『拝啓、仕事人様、あなたがこの手紙を読んでいると言っていることは、私は恐らくこの世には居ないでしょう、

もし、仕事を受けて下さるのであれば、このお金をお受け取り下さい、娘の保険金です、どうかこれで娘の敵を取って下さい』

「確かに受けたよ、もうあいつらは生かしておかへん」

一週間後、全ての人物が特定された。

「さて、普段のお仕事は終わったし、仕事の後は仕事だよ」

はやてを座長にテーブルを囲む6人。

「殺しの的は、ジョニー・マクシミリガンとその息子ダニエル、ダニエルの仲間8人、刑事が2名や、

しめて1000万の仕事や、抜かるんやないで」

「署長と息子は私が殺ろう」

シグナムはそう言った。

「じゃあ、私は刑事達を」

シャマルが答える。

「じゃあ私ら4人で残りのザコを片付けるよ」

ヴィータがそう言うと、リン、アギト、ザフィーラが頷く。

仕事が始まった。

場所は、廃棄都市区画のとある雑居ビル。

ダニエルの仲間達は、ここを根城に悪さを繰り返していた不良共だ。

ビルの一室で、たむろする8人タバコの煙が立ちこめ、酒瓶やら、ドラッグの錠剤やらが床に散らばっている。

それは、一瞬の出来事だった。

突然、コンクリートの壁を突き破って、太い腕が入ってきた。
8人の中の一人をひつつかむと、その穴の中へ引きずり込んだ。

ボキッ、バキッ、グシャッものの凄い音がする。

そして投げ返された時、彼は人の姿ではなかった。

全身の骨という骨を砕かれ、手足を体の中に押し込まれた姿は、雪だるまの様な、極めて異様な光景だった、これが本当の肉達磨である。

やったのはザフィーラだった。

彼らは慌てて逃げ出した。

だが、玄関を出た所で二人が上から振り下ろされた巨大なハンマーに押し潰された。

まさにぺちゃんこ、車に轢かれた蛙のようになっていた。

裏口から逃げようとした二人の足が止まる、まるで凍り付いた様に…… 本当に凍っていた。

その氷が、みるみる間に全身を包み、完全冷凍してしまう。

「さようなら」

そう言ってリィンは、二人を蹴飛ばした。

カチャーン

ガラス細工が砕けるごとく、二人は砕けて散った。

1階の窓から飛び出した二人の先にはアギトが待っていた。

「これでも喰らいな」

一人が火だるまになった。

「良く味わえよ」

もう一人の口に手を突っ込むと、強烈な火炎をお見舞いした。

火炎は、食道から胃を焼き尽くし、或いは気管支から肺を焼き尽くした。

アギトの仕事が終わった頃、ザフィーラがもう一つの肉達磨を完

成させていた。

二人の刑事は、風俗の帰りだった。

どこからともなく二人の首に糸の様な物が巻き付いてきた。

一気に締まったワイヤーは二人を暗い路地に引きずり込んでいた。そのまま3階ベランダの手すりに掛かって二人を中吊りにする。

「あら、まだ死なないのね、でも、そろそろお逝きなさい」

シャルが、1本目のワイヤーを少し引いてから「ヴン」と弾く。まず一人が絶命する。

それを見たもう一人が手を合わせて命乞いした様だが、そんなことに容赦はしなかった。

彼女が二本目のワイヤーを弾いた時、既に仕事は完了していた。

ピンポーン

「誰だ、こんな夜遅くに」

「夜分遅くすいません、防衛隊のシグナムと言いますが、この辺りまで殺人犯を追いかけてきたのですが、

見失ってしまいました、ご協力願えないでしょうか？」

ガチャ

ドアを開けたその瞬間だった。

ズドッ！

ジョニーの腹に下から剣が突き立てられた。

そのまま心臓を切り裂き、首の付け根から後ろへ貫通していた。

「ああ、殺人犯はこんな所にいましたね」

剣を引き抜くと、家の中に入っていく。

ダニエルは、自室でゲームに興じていた、突然入ってきたシグナムに、いきなり斬りつけられた。

それでもまだ息があった。

「これまでお前が殺してきた人たちの恨みだ、じっくり味わえ」

彼の胸の上に剣を立てるとゆっくりと押し込んでいった。

「また出たんだってよ、仕事人」

「今度は、不良警官だったらしいぞ」

「何でも、罪のない一般市民を12人も殺してたんだとか」

「怖いねえ、警察も信用出来ないよ」

「むしろ、俺たちの味方は仕事人だよな」

そんな、サラリーマン達のうわさ話を聞き流しながら、はやてが出勤していく。

そう、この世に泣く人がある限り、仕事人は何時でもどんな相手でも必ず仕事を完遂する。

第1話、完

女子大生レイプ殺人事件（後書き）

次回はザフィーラが主役です

ザフィーラ悲恋！（前書き）

普段は寡黙なザフィーラが恋をした？

ザフィーラ悲恋！

仕事料が入ると、市内の居酒屋に一人で飲みに行くのが、ザフィーラの密かな楽しみだった。

オオカミの姿では入店拒否される飲食店も、人の姿なら文句の一つも言われない。

まあ、犬耳、尻尾は、「俺は獣人だから」で通している。

それに八神家では、普段の食事は安いドッグフードだ。

（ミッドチルダのドッグフードは、地球の物より品質が悪く、味も不味いらしい。アルフの証言より）

たまには良い肉が食いたい。

この居酒屋「日本」、店主は日本出身で、酒や食材は地球から取り寄せているのだという。

ザフィーラのお気に入り店の一つだ。

いつもの様に、カウンターの端っこに陣取ってまずビールから入る。

「旦那、今日は良い肉が入りましてね、牛刺しなんかいかがでしょう？」

「何？、そうか、なら醤油の代わりに岩塩と胡麻を振ってくれ、酒は生酒に替えようか」

「旦那も通ですねえ」

よく冷えた生酒をチビリとやりながら、皿に盛られた牛刺しに舌

鼓を打つ、実に旨い。

舌の上に載せるとそれだけで溶け出してくる肉の脂に、控えめに振られた岩塩の塩味が絶妙だ。

また、チビリとやる。

今日は、良い肉に出会えたと喜んでいると、不意に横から声を掛けられた。

若い女だった、良くあることだ、ザフィーラの太い腕に、分厚い胸板に魅せられた女が良く声を掛けてきた。

ザフィーラはいろんな意味でオオカミである。
このままホテルへ直行することも良くあった。

だが、ミッドチルダの女を甘く見ては行けない、見た目と年齢が違ふことなどしょっちゅうなのだ。

最初の失敗は、ホテルだった、いざと言う時になって相手の変身制御が解けてしまい、思いつきり萎えた。
60近いババアだったのだ。

それ以来、相手の臭いで年齢を確認することがザフィーラの癖になつていた。

今回は、年寄り臭い匂いはしない様だ。

適当に女に話を合わせながら、酒を勧める。

何となく、女の飲み方がぎこちなかったが気にしない。

女が軽く酔ってきたのを見計らって、勘定をする。

ホテルは、店から歩いて5分の所だ。

女と腕を組んで歩き始めてすぐ、数人のチンピラ共に絡まれる。

「お兄さん、いい女連れてるじゃあないか、俺たちに貸してくれよ」

どうもこの辺りのチンピラ共ではないらしい。

ザフィーラは、この界隈では遊び人のザッフィーさんとして名が通っている。

この辺りのヤクザ共でさえ、彼にケンカを売ることはないのだ。

「おい、あいつら馬鹿だろう？あのザッフィーさんにケンカ売ってるよ、殺されるぞ！」

通行人達がそんな話をし始めていた。

その声は、ちんぴら達にも聞こえていたが、今更引くに引けない。最初に一人が殴りかかってくるが、その拳を受け止めて、そのまま握り潰した。

チンピラその1は、悲鳴を上げてのたうち回る。

二人目がナイフで刺してきたが、やはり腕を捕まえてへし折る。同じ結果だった。

結局、残りの三人は二人に肩を貸して、逃げていった。

だが、その先にこの辺りを締めるヤクザさん達が待っていた。かわいそうに、小指の一本で済めばいいが、多分ドラム缶だろう。

ザフィーラは、女とホテルの一室にいた。

シャワーを浴びて、一度目を済ませた所だった。

「今更なんだが、君の変身を解かせて貰おう」

そう言つて、彼女に強めに魔力をぶつけると、変身が解けた。

見た目、11〜12才の少女だった。

やばい、ザッフィーのストライクゾーンど真ん中だ。

そのまま押し倒して、5回ほど……今、彼女はザフィーラの腕の中で満足そうに、寝息を立てている。

そつと彼女の頭を撫でると、目を覚ました。

「野暮なこと聞く様だが……」

彼女に「何故」と聞いてみた。

「私帰る所も、待つてる人も居ないから、これしか生きていく方法が分からなかったし……」

彼女は既に天涯孤独の身だった。

両親は、会社を経営していたのだが、ある日突然殺され会社も人手に渡ってしまったのだ。

両親を殺され、財産さえ失い、それでも懸命に生きていこうとしていたのだ。

「管理局の保護は受けなかったのか？」

「ダメだよ、あそこはろくに人の話を聞いてくれないし、人手不足で忙しいとか言つて、まともに手続きしてくれないし」

「判った、俺がなんとかしてやろう、それまでは、俺の知り合いの所に預けるがそれで良いか？」

翌朝早く、ザフィーラは彼女をフェイトの所に連れて行った。

「仕事上の成り行きで、天涯孤独の少女を保護した、2、3日預かって欲しい」

その言葉をフェイトは快諾してくれた。

流石にフェイトの仕事は速かった。

あっという間に、生活保護の手続きと、アパートまで世話してくれたのだ。

「お前にアルバイトの口を紹介してやる、人前では絶対に変身を解くなよ」

そう言って連れて行ったのは、あの居酒屋だった。

店のおやじに頼み込んで、ウェイtresとして雇って貰ったのだ。

何時しか、ザフィーラは彼女のアパートで逢瀬を重ねる様になっていた。

そんなある日のことだった。

飲みに来たザフィーラは、彼女の様子がおかしいことに気付いた。イヤに殺気立っている。

心配になって話を聞いてみると、敵が現れたことが判った。

敵は、彼女の父親の会社を乗っ取った、現社長、副社長、専務、そして警備係（実は殺し屋）2名だった。

「おい、馬鹿なことは考えるなよ、お前一人じゃあ殺されに行く様な物だ！」

もし、それでも敵が討ちたいのなら、仕事人を頼め、きっと何とかなる」

彼女を宥めながら、アパートまで送る。

そして彼女を抱いたのが最後だった。

数日後、彼女は変わり果てた姿で見つかった。

彼女の首に掛かったロケットには、幼い女の子と、幸せそうな両親の姿が映っていた。

怒りに打ち震えるザフィーラ、その目は見る物全てを殺しそうな殺気に満ちあふれていた。

彼女のアパートを片付けに言った時、机の上に封筒を見つけた。封筒には「仕事人様」とだけ書かれていた。中に30万入っていた。

ザフィーラはそこに20万足して50万にした。

仕事が始まった。

「殺しの的は、アルバトロス社の現社長、副社長、専務、そして警備係2名や」

「警備係の二人は、どうしても俺にやらせてくれ」

ザフィーラはそう言った。

「じゃあ私は社長だな」

シグナムが答える。

「じゃあ私は副社長を」

シャルはそう答える。

「あたしは専務だな」

ヴィータがそう言う。

「リンとアギトはお留守番な」

翌日の夜、社員達が帰った頃、彼らは社長室で悪巧みをしていた。

「この会社もだいたい売り上げが落ちてきたし、そろそろ売り払ってまたどこかを乗っ取るか？」

「良いですな、社長！」

その時だった、窓ガラスを割って石が投げ込まれる。

警備員が二人、外に飛び出してくる。

待ちまえていたのは、ザフィーラだった。

この警備員、違法魔導師だった。

強力な直射砲撃を二人で撃ってくる、しかし、そんな物は盾の守護獣ザフィーラには通用しない。

簡単に弾いて、相手を威圧する。

「鋼のくびき！」

強烈な、目に見えない何かが通り抜けた瞬間、彼らの両足は切断されていた。

「おい、この程度だと思ふなよ」

二人の顔面を掴むと自分の顔の高さまで持ち上げる。

「お前らには、あの子が残した恨みがたっぷりあるんだ、じっくり味わって死ね」

そう言つと、両手に力を込め始めた。

ミシッ、ミシッと頭蓋骨がきしむ音がする。

「やめ……たすけ……」

グシャ

脳みそをぶちまけて二人は死んだ。

それを見ていた社長達が逃げようとする。

一番初めに廊下に出たのは、専務だった。しかし、廊下の先で一瞬にして殺された。脳天には、例の如く四角い穴が空いていた。

副社長は反対方向へ逃げていた。

だが、彼の首にいつの間にか、糸の様な物が巻き付いてくる。一瞬にしてそれは絞まった。

「ぐっ、がっ」

シャルの手から伸びたワイヤーが彼の首を捉えていた。彼女はそのワイヤーを勢いよく引き抜いた。

瞬間、彼の首は頸動脈まで引き裂かれ、派手に血の海を作ってそこに沈んだ。

カッーン、カッーン、

社長室に向かって歩いてくる者が居る。

社長は、言いしれよう無い恐怖に囚われていた。机の引き出しに隠した拳銃を取り出す。

足音がドアの前まで来た時、銃を乱射する、15発撃ち尽くした。しかし、ドアが開いた時、そこには誰もいなかった。

遅れて入ってきた女が剣を抜く、その剣を社長の胸に突き付けると、ゆっくりと押し込む様に突き立てた。

「貴様みたいなのが居るから、泣かなきゃならない人間が減らない

んだよ」

彼女が剣を引き抜いた時、仕事が完了した。

ザフィーラは、海に見える小高い丘の上に、あの女の子の墓を建てていた。

そして、あのロケットをそっと掛けてやる。

「済まないな、今の俺にしてやれることはこれくらいだ」

そう言って、頭を垂れた彼はそのまま何時までも黄昏れていた。はやてが声を掛けようとしたが、彼の背中が、声を掛けてくれるなと訴えていた。

もしかしたら、これはザフィーラの恋だったのかも知れない。

第2話 完

ザフィーラ悲恋！（後書き）

次回は、ヴィータが主役です。

ヴィータ慟哭（前書き）

悪得小役人にヴィータの怒りが炸裂する。

ヴィータ慟哭

教導隊の仕事が終わると、ヴィータはいつもの様に買い物に行く、教導隊の隊舎の近くの裏通りには、年寄り夫婦が細々と営む駄菓子屋があった。ヴィータは、この駄菓子屋が大好きだった。

この駄菓子屋、とにかく品揃えが豊富で、単品の値段が安い。毎日買い食いしたって、そんなに財布に響かないから、気に入っていた。時々遊びに来るヴィヴィオと一緒に、買い食いしに来ることもあった。

また、年寄り夫婦から見れば、お子様なヴィータは、孫の様に見えるのかも知れない。

毎日の様に可愛がられて、二人に甘える幸せなひとときであった。

この場所は、廃棄都市区画に近く、先のJS事件の際に、大きな被害の出た区域とも隣り合っていた。

「どおだ、なのは、食べるか？」

「また買ってきたんだ？ヴィータちゃん、ホント好きだね」

「疲れた時は、甘い物に限るって」

どこかで誰かが、同じ事を言っていた様な気がする。

なのはは知っている、この日もヴィータはアイスを買い食いして

きたことを……（笑

「あたしら守護騎士は、人間じゃあないから太らねえし、糖尿病とも無縁だ、イイだろ」

「でも、太くなって欲しい所もあるんだよね」

「うっ」

言い返せない。

確かに、胸とおしりはもう少し欲しい、それ以上に身長が後15センチは欲しい所だ。

何せ大人用の事務机では、仕事が非常にやりにくいのだ。でも、彼女はこの姿で既に1000年以上生きている。

正確な活動時間の合計からすれば100年には満たないのだろうが、この十数年は、今までで最も長い活動時間と言える。まあ、製造されてから軽く1000年と言った所だろう。

歴代の主人は、どういつもこいつも酷い奴ばかりだった。人間として扱ってくれたことなど、ただの一度もなかった。そのくせ、戦争の道具として、殺戮の兵器として自分たちを扱った者ばかりだった。

毎日の様に戦いに明け暮れ、血にまみれた生活だった。しかし、この十数年は幸せだった、多少の血は流れたかも知れないが、あの戦争に比べたら大したことではなかった。そしてまた、血を流す生活を始めてしまった。

ただ以前と違うのは、主人の私利私欲ではなく、あくまで弱い人

の為、その恨みを晴らす為に悪人を殺すという事であった。

主はやては、決して私利私欲の為に人を傷つける様なことは、しない人間だった。

だが、虐げられている人を見た時の怒り方は、尋常ではない。

人の為に怒り、人の為に泣くそんな主だからこそ、彼女の考え方に賛同したのだ。

実際、この仕事を始めて、酷い人間の多いこと、昔こんな奴らに仕えていたかと思うとぞっとした。

私利私欲の為なら、人の命など何とも思わない連中ばかりだった。

もしかしたら、今自分は、昔の罪滅ぼしをしているのかも知れない。

遠い目でそんなことを思いながら、空を見上げることもあった。

昔のヴェルカの空は、戦艦に埋め尽くされ、地面は血溜まりがあちこちに出来、

硝烟と人が焼ける匂いが立ちこめるそんな世界だった。

今の空は、そんなことを微塵も感じさせない、綺麗な青い空だ。

ヴィータは、そんな青い空が大好きだった。

咲き乱れる白い花が大好きだった。

「いつか誰もが笑って暮らせる世界の為に」

はやてのその言葉を信じ、戦うことを決意したからこそ、この仕事を続けていけるのだ。

空を見上げながら思う、明日も良い天気だ。

数日後、あの駄菓子屋に行くと、ここを閉めるという話を聞いた。市役所の建設課が、被害地区から廃棄都市区画に掛ける再開発事業を決定したのだという。

JS事件後、被害を受けて寂れた地区の、治安の悪化には目を覆う物があつた。

ただ、この駄菓子屋のある一角は、近くに教導隊の隊舎がある関係で、比較的治安が安定したのである。

ただ、今回再開発区域に入ってしまったことは、残念ではある。

「私らは、保証を受け取ったら、どこかの老人ホームに入るつもりだよ」

おばあちゃんはそう言った。

「そっか、何だか寂しくなるな、ここのお菓子大好きだったのに……」

非常に残念なヴィータだった。

既に、廃棄都市区画部分では、ビルなどの解体が始まって居た。教導隊の仕事のない日は、なのは達が駆り出されることもあつた、強力な砲撃で廃棄ビルを破壊して、更地にしていく、実に作業が早かつた。

残つたのは、まだ人が住んでいる地区だけになっていた。所が、何時になっても補償交渉が纏まらない。

正確に言えば、一時金さえ払って貰えないで居た。

当然、住民と市役所の間で衝突が起きる。
初めは、なのは達教導隊に住民排除の命令が来たが、なのはがこれ
を突っぱねた。

「悪いのは、お金を払わない市役所の方よ、私たち管理局は筋が通
るまで協力はしません」

しっかりと筋を通したなのはだった。

だが、それが最悪の事態を呼んでしまった。
現れたのはヤクザ者たちだった。

住民に次々と暴力をふるい、排除に掛かったのだ。
当然、住民側も激しく抵抗した。
しかし彼らは、銃や刃物を抜き、とうとう死者が出てしまった。

「あなた、しっかりして」

おばあちゃんが、既に動かなくなったおじいちゃんを抱き起こそ
うとしていた。

ヴィータは間に合わなかった。

大好きなおじいちゃんを、救うことが出来なかった。

「畜生、あいつら全員殺してやる！」

グラーフアイゼンを手に、飛び出そうとするヴィータを止めたのは、
はやてだった。

「ヴィータ、あんたは優しい子おや、ただどな、自分の怒りだけで殺しても何の解決にもならへん、仕事になるまで待つんや、その怒りは、あの人達の怒りを、お金の重みを背負ってあいつらにぶつけたるんや」

二日後の夜、ビリケンさんの前に、あのおばあちゃんがやってきた。

「このお金は、老後の為に私とあの人で貯めた物です、これであの人の敵をお願いします」

「判った、受けよう」

ヴォイスチェンジャーを通した、囁れた声がそう答える。ビリケンさんにはカメラと、マイク、スピーカーが内蔵されているのだ。

おばあちゃんは、ビリケンさんに一礼すると、来た道を帰らずに、まっすぐに海の方に向かって歩き始めた。

「不味い、止めるんやヴィータ」

家からヴィータが飛び出していくが、間に合わなかった。おばあちゃんは、岬の先端から身を投げていた。助け上げた時には、もう、息がなかった。

「なんでだよ、どうして……」

「ヴィータ、その人はなあ、優しかったんや、優しすぎて人が憎めなかったんや、だから自分の命を引き替えにしたんや、その人の優しさに答えてやりい」

涙を流しながら、頷くヴィータだった。

はやての調査で、敵が判明する。

市役所建設課の課長が、保証金を着服していた。

その上前を、市議会の、グレン議員が撥ねていた。

グレン議員のボディガード兼、下請けのアルコバーノ一家総勢30名が係わっていた。

まさに、政・官・業の癒着である。

今回は人数が多い、どうする？

「あたしは課長を殺る」

そう言ったのは、ヴィータだった。

「じゃあ私が議員を仕留めるわ」

そう答えたのは、シャマルだった。

「残りのザコは、全員で行くよ、私も今回は出るから」

はやてがそう言った。

仕事が始まった。

課長は、仕事帰りだった。

最近仕事が忙しくて、帰りが遅いのだ。

夜道で出くわした赤い髪の少女に、暗い路地へ引っ張り込まれた。
その瞬間、少女の出で立ちが変わる。

アイゼン、ギガントシュトラークだ。

課長は一撃で叩き潰された。

それでも、ヴィータの怒りは収まらなかった。

「お前が……お前があんな事をしなけりゃ、じいちゃん達は死なずに済んだんだ！」

彼の姿形が、完全に無くなるまで叩き続けていた。

同じ頃、議員とヤクザ達は、事務所で飲んでいた。
1回で爆発の様な衝撃が起きる。

飛び出してきた下っ端が、一組の男女を囲んだ。

「さあ行くぞ！」

そう言つてシグナムは斬りかかった。

「天狼拳！」

天狼拳の正体は、指先で決ることではない。
掴んで千切り取ることだ。

とてつもない握力と、拳速が要求されるとんでもない拳法だ。
喰らった部分はオオカミに食いちぎられたかの如く、引きちぎられていく。

あまりの拳速により、痛みよりも、冷たさを感じるといふ。

あっという間に7人が、死体になった。

それを見ていたヤクザ達が次と1階に下りてくる。

これはやばいと思つたのだろう。

グレン議員は、裏口からそつと逃げ出していた。

しかし、そこに待っていたのはシャマルだった。

一瞬にして彼を吊し上げると、そのワイヤーを指先で弾いた。

それがグレン議員の最期だった。

1階と2階ではまだ戦いが続いている。

1階ではシグナムとザフィーラが、2階ではリインとはやてが戦っていた。

次々と凍らされて、或いは石にされて碎ける組員達、銃撃すら通

らない強固なバリアを持っていた。

1階も死体の山が出来ていた。

切り捨てられ、或いは体中を千切られてバラバラにされた者たちが、積み上げられていた。

組長のアルコバーノがマシンガンを持ち出した。

葉巻に火を付けようとした瞬間だった。

小さな手が、勝手に葉巻に火を付けてくれた。

「最期の一服だ、良く味わいな」

そう言われた瞬間、彼は、火だるまになった。

アギトの仕事が完了した頃、下も片が付いていた。

ヴィータは、岬の突端で海を眺めていた。

青い空と、青い海が解け合って、どこまでが水平線なのかよく分からない、穏やかな景色だった。

この景色の様に、誰もが穏やかに生きていける、そんな世界を願わずにいらなかった。

不意にはやてが、後ろにやってきた。

そつとヴィータを抱きしめる。

「よう頑張ったな」

はやての言葉に、涙を流しながら頷くヴィータだった。

「ようわかつとるよ、あんたは優しい子おやから」

はやての言葉が、痛いほどに優しく胸に突き刺さった。

第3話 完

ヴィータ慟哭（後書き）

次回はシャルマルが主役です。

シャマル先生キレる（前書き）

弟子の悪行に、シャマル先生がぶち切れる。

シャマル先生キレル

ここは、地上本部総合医療センター、シャマルの職場である。

ここには、いわゆるゴッドハンドと呼ばれる凄腕の医者達が集められ、任務で傷付いた局員達を治療している。

他にも、幹部の健康管理とか、場合によっては、クラナガン大学の医学部と人事交流をしたり、いろいろと複雑な人間関係が交錯する場所でもある。

シャマルも、そんなゴッドハンドの一人である。

持っている免許は、一般外科、内科、魔法治療科の三つである。

特に、魔法治療の権威であり、難しい呪いの様な魔法を解いたり、一般外科と魔法治療の融合は、画期的に救命率を上げることに成功していた。

また、他の科と共同で大きな手術をすることもあった。

元々彼女は、医者だった訳ではない。

はやてが主になってから、彼女の足を治す為、大学に通い医師免許を取得し、ここまで上り詰めた苦労人なのだ。

彼女の人柄を慕ってか、医療センター内での人気も人一倍高い。

男女問わず、シャマル先生に声を掛けてくれる。

そんな彼女が、仕事人をしているなんて誰が想像するだろう？

シャマル自身、今自分のしていることが信じられないで居るのだ。人を救う立場にありながら、人を殺している。

せめてもの救いは、殺している人間全てが、悪人であると言うこと、ただそれだけだった。

はやては言う、最も仕事人に向いているのはシャマルなのかも知れないと。

普段、患者に惜しめない愛情を注ぐ彼女も、悪人に容赦したことは一度たりとも無い。

殺すその瞬間も、ただ、淡々と相手を殺していく。
いつからだろう？こんなに人の死に何も感じなくなったのは？

元々、ヴェルカ戦乱の時代からそうだったのか？それとも医者になって、あまりに多くの死に出会ったからなのか？
今となっては、それも遠い忘却の彼方である。

それでも、彼女が感情を露わにする時、それは虐げられ、虐待された末に殺された人を見た時である。

総合医療センターには、鑑識セクションとして、司法解剖を行う部署もある。

当然、人手不足による監察医の不足から、彼女が解剖を手がけることも珍しくなかった。

不当な暴力の末に、命を落とす人のなんと多いことか？

そんな被害者を見るたびに、彼女の怒りは静かに大きく燃え上がるのだった。

そして、そんな被害者や家族の為に涙を流す主を見ては居られなかった。

自ら進んで、主の為、被害者の為に仕事人となることを選んだのである。

総合医療センターは、局員だけでなく、難しい病気や大ケガをした一般市民も多く入院している。これだけ高度な医療が行えるのは、ヴェルカ聖王病院と総合医療センター、そしてクラナガン大学付属病院の3カ所である。今は、シャマルが育てた弟子達も多く活躍し、医療全体の底上げにも貢献しているのだ。

「シャマル先生」

声を掛けてきたのは、ジェリマーくん5才、小児科病棟に入院している男の子だ。

彼が来ると、あっという間に他の子供達にも囲まれてしまう。シャマル先生はどこへ行っても人気者なのだ。

「こら、あんまり走り回つてるとまた痛くなっちゃうぞ?」

彼は、一月ほど前、原因不明の腹痛で入院してきた。

小児科は、シャマルの担当ではないのだが、当直の際小児病棟を担当して仲良くなったのだ。

「はい、ごめんなさい、でもシャマル先生だーいすき」

そう言って抱き付いてくるこの子が可愛かった。

ジェリマーさんの両親は、共働きで、下級局員である。
忙しくて滅多にお見舞いにも来られない為、シャル先生になつてしまったのだ。

シャルも満更ではなかった。

このまま彼を育てても良いかな？何て考えることもあるほどだ。

「シャル先生、ちょっと良いですか？」

声を掛けたのは、小児科のキンブル医師だった。

「どうもおかしいのですよ？」

検査結果に何の異常も見当たらない、むしろ健康体そのものなんです。

運ばれてきた時の、あの痛みがりがりが噓のようです」

ジェリマー君の検査結果は何の異常もないのだという。

「内科医としての、シャル先生の意見を聞きたい」

「脳神経の関係は検査したのでしょうか？」

もしそれでないとするなら、呪いの様な魔法かもしれません」

「どちらもまだ検査していません、明日早々にも検査を入れておきます」

それが、キンブル医師と交わした最後の言葉となった。

翌日、彼は駐車場の車の中で、変わり果てた姿となって発見された。

それだけではなかった。

あのジェリマー君が原因不明の発作で死んでしまったのだ。

この時、シャマルは、病院の中で何か得体の知れない物が蠢いていることに気付いた。

キンブル医師絡みの捜査をはやてに依頼した。

「はやてちゃん、恐らくただの殺人事件にはならないと思うの、もっと大きな何かが動いている様な気がするの」

はやても、事件の匂いを感じていた。

「シャマルも命を狙われる可能性がある、これから、それとなく警護を付けるから用心しい」

手分けをして捜査が始まった。

そんなとき、ジェリマーくんの両親が彼の遺体を解剖して欲しいと、警察に持ち込んでいた。

カルテには心臓発作と有るが、とても信じられなかった様だ。

シャマルが警察に出向いて司法解剖を担当した。

結果は驚くべき物だった。

心臓に、肝臓、腎臓も抜き取られて無くなっていた。

代わりに、体の陥没を防ぐのと、体重調整の為だろうか、医療用の

水風船が入っていたのだ。

体の表面に傷を残すことなく、臓器を抜き取り、水風船を入れる。

シャマルには心当たりがあった、これは自分の教えた魔法を応用した物だ。

主要臓器を抜き取るとすれば、転売目的か、移植しかない。

考えられる犯人は、循環器外科のクロフォード医師だ、彼は新進気鋭の医師として売り出し中の若手ナンバーワンだ。

だが、彼だけではないはず、白い巨塔に巣くう巨悪が見え隠れしていた。

ジェリマーくんの両親に、辛い報告をしなければならなかった。それ以上に、シャマルの怒りは大きかった。

もう、これ以上犠牲者を出す訳にはいかない、一刻も早く事件の解決をしなければならなかった。

翌日夕方、ビリケンさんの前に3人の人影があった。

キンブル医師の妻と、ジェリマーくんの両親だった。

「このお金でどうか、敵を討って下さい」

「判った、受けよう」

ビリケンさんはそう答えた。

仕事が始まる。

「殺しの目的は、医師クロフォード、事務長、医局長、移植コーディネーターのトーマス、経理係長の5名や、奴らは、移植患者からの多額の謝礼と、高額な手術料を目的に既に7人の犠牲者を出しとる。

絶対に生かशीたらあかん、始末するんや」

「私がクロフォードを仕留めるわ、医者としてのケジメを付けます」

シャマルの顔はいつもの優しい顔ではなかった、仕事人として怒りを纏った厳しい顔になっていた。

「あたしがトーマスを殺ってやるよ」

ヴィータがそう言った。

「じゃあ私は、事務長だな」

シグナムが答える。

「俺は、医局長を殺ろう」

ザフィーラが名乗りを上げた。

「私は経理係長をやつつけるです」

リンがそう答える。

その夜、移植コーディネイターのトーマスは、次の獲物を見つけるべく、膨大な遺伝子情報を検索していた。

移植待ち患者の、データに一致した遺伝情報を、健康診断のリストからいくつかピックアップしていた。

このリストから、ピックアップした者を入院させる為、魔法を仕掛けるのだ。

次の犠牲者の家の近くまで歩いていく、後ろからヴィータが付けていることにも気付かずに……

「ふうん、そうやって魔法を仕掛けるんだ？」

後ろから声を掛けられただけでなく、これからやろうとしていることを見抜かれていた。

「お嬢ちゃん、どうしてそんなことを知って居るんだい？」

「仕事人だから」

「えっ」

その瞬間、脳天にラケーテンハンマーが振り下ろされていた。

事務長と経理係長は、居酒屋で飲んでいた。

丁度、移植手術料と、謝礼がたんまり入った所だった。

しこたま飲んで、居酒屋を出た所で、若い女に暗い路地へ引っ張

り込まれた。

そしていきなり剣を抜かれた。

慌てて逃げ出す二人、しかし、経理係長の足が止まる。

止まったのではない、凍ったのだった。

みるみる氷に覆われ、経理係長は完全に凍結した。

飛んできたリンが後頭部にドロップキックをお見舞いすると、彼はゆっくりと傾いて、倒れて砕け散った。

事務長も動けなかった。

首筋に剣を押し当てられていたからだ。

「貴様、これまでに何人を食い物にしてきたんだ？家族がどれだけ泣いているか知っているのか？」

答えられなかった、そんなことなど気にも留めたことはなかったのだ。

「あの世で詫びろ」

シグナムはそのまま剣を振り抜いた。

彼は首を刎ねられて、絶命した。

医局長は、仕事を終え、車に戻ってきた所だった。

エンジンを掛けて、アクセルをふかすとガクンと車下がった。

タイヤが外れて転がっていく、誰かがタイヤのナットを抜き取っていた様だ。

車から降りて、状態を確認しようとする。
ドアミラーには、いかつい男が映っていた。

タイヤの外れた部分を確認する使用と屈んだ瞬間だった。
首をいきなり捕まれた。

そのまま首を握り潰されて、彼は命を失った。

その頃、病院の屋上では、シャマルが、クロフォードを呼び出していた。

「クロフォード君、あなたが何をしていたかは既に判っています、
何故あんな事をしたの？」

「やだなあ、そんなの決まってるじゃあないですか？ 僕の名声を上げる為ですよ。」

凄腕の看板医師がいれば病院は儲かるし、独立したって名前だけで患者は集まる。

僕も良い練習になりましたしね」

「私は、そんなことの為に魔法手術を教えた訳ではありません、あくまで人の命を救う為です」

「やだなあ、医学に貴い犠牲は付き物じゃあないですか？ 何を言ってるんですか」

「そう、これ以上あなたと話し合っても無駄なようですね」

「何ですか？ 僕を訴えるんですか？ その前にキンブルさんと同じに

なりますよ」

そう言った直後だった。

ビスッ

彼の喉から首の後ろに掛けて何かが貫通していた。
クラールヴィントのペンデュラムだった。

クラールヴィントのペンデュラムは、ただの振り子ではない。
彼女の意思で、自在に動くことが出来るのだ。

そして、ペンデュラムで首を撃ち抜いて、脊髄を切断していたのだ。

もはや彼は動くことも、声を出すことも出来なかった。

「アレが何か判るかしら？」

そこに並べられていたのは、移植臓器を入れるクーラーボックス
だった。

シャマルは、ペンデュラムを彼から引き抜くと、彼の上にペンデ
ュラムのワイヤーでサークルを作る。

シャマルの魔法「旅の鏡」だ、サークルの中の黒い空間は、相手の
体内とリンク出来るのである。

その中に手を突っ込んだ。

まず、右の腎臓を取り出す、次は左だ。

「どお、痛いでしょ、あの子はこれと同じ痛みを味わったのよ。
ゴメン、脊髄切れてるから、痛みは感じないのよね」

その次は、肝臓だ。

「あら、まだ息があるのね、じゃあ次で終わらせてあげるわ？
せめて最後くらい、世間様のお役に立って死になさい」

最後に心臓と肺を取り出して、代わりに水風船を詰めておいた。

翌日の検視報告書には、脊髄損傷とだけ書かれていた。

取り出された臓器は、その日の内に、聖王病院と、クラナガン大学付属病院で移植に使われたという。

あれから数日が経っていた。

何人かの医者が減り、総合医療センターは、ネコの手も借りたいほどの忙しさだ。

また一人、急患が運ばれてくる。

シャルマルが陣頭指揮をして、患者を手当てしていく。

今日もシャルマル先生は輝いていた。

第4話
完

シャマル先生キレる（後書き）

次回は、リン&アギトが主役です

リン&アギト仕事人になる（前書き）

はやて達の仕事を見てしまったアギト、そして彼女も仕事人に加わる。

アギトは過去にも……

リン＆アギト仕事人になる

それは、アギトが海上隔離施設を出て何ヶ月かのことだった。

彼女は、J S 事件の重要参考人であり、ジェイル・スカリエッティに協力した罪で、3ヶ月ほど教育を受け、シグナムに引き取られたのだった。

彼女の保護責任者は、シグナムである。

因みに、リンの保護責任者は、はやてである。

彼女は見てしまった、シグナムが、はやてが人を殺す瞬間を……

「なあ、リン、お前は知っているのか？」

「あちゃー、もう知られてしまったですか？」

「じゃあ、お前は知っていたんだな？」

それは、ほんの出来心からだった、時々、夜遅く出かけていく彼らの跡を付けてしまった。

その先で見た物は、まさに人殺しの現場だった。

「昔、同じような事をしてたからな」

「えっ？」

「ゼストの旦那もさあ、自分が許せねえって思った奴は皆殺しだったからさあ、なんか似てるかなってさあ」

アギトは、ゼストとルーテシアに助け出されて以来、彼らと行動を共にする様になる。

ゼストは、違法研究施設や、奴隷同然に扱われる人見る度、虐げている人間を皆殺しにしていた。

アギトも、何時しかそれを手伝う様になっていたのだ。

「まあ、時々、金の無くなる頃にドクターの依頼で、仕事をする事もあったけど、

基本はボランティアだな？随分殺したし」

「そおだったんですか？、でも、これはゼストさんとは違う考え方で動いています」

「いちいち説明するより、これを見るです」

モニターに出されたのは、97番世界特集だった。

更に詳しく言えば、必殺仕事人を見せられたのだ。

「うおおお~~~~~、かつちよいい！、髪型変だけど」

「見るのはそこじゃあなくて、考え方です」

「なるほどなあ、弱い人たちに代わって復讐を……か？」

「そうです、なけなしのお金を積むと言う事は、それだけしてでも復讐したいという心の表れです。

だから金額にはこだわりませんし、必ず仕留めます。

ただ、いくらお金を積まれても、私利私欲や、見当違いの相手を殺

す事は絶対にしません。
きちんと下調べしてから、殺るです」

「何だか随分面倒くせえなあ」

「世界には、悪い人たちが大勢居ます、その陰で虐げられて泣いている人たちが、もっと大勢居るんです。

不当な暴力の末に殺されたり、誰かの欲望の犠牲になる人が、あまりに多いんです。

だから、そんな人たちの為に、誰かが立ち上がる必要があったんです」

「なるほどねえ、そう言う事だったんだ？」

「アギトはどうするですか？このまま何もしない代わりに何も喋らないか、

一緒に戦うか？それとも死ぬか？どれにするのですか？」

「死ぬって何だよ？」

「喋られるくらいなら、始末するって事です」

「随分物騒だな」

このやり取りの少し後だった、彼女が仕事人として、6人目のヴォルケンリッターとして仲間に加わったのは。

この仕事を始めてみると、なんと悪い奴の多い事か？あのドクタ
ーと比べたら、
スケールこそ小さいくせに、悪さという面では、スカリエッティを
遙かに凌ぐ酷い奴ばかりだった。

何故、この世に仕事人が必要なのか？改めて思い知らされた。

「本当は、アギトやリインには、こんな事を知らずに生きて欲しか
った」

はやての本音だろう。

彼女は、八神家の末っ子二人を、心の底から大切に思っているから
こそ、そんな事を口にしたのだろう。
だが、現実はそのを許さなかった。

アギトが、6人目のヴォルケンリッターに名乗りを上げ、仕事人
に加わった事で、
それまで仕事をさせて貰えなかったリインもまた、仕事人に加えら
れたのである。

アギトとリインは、仲が悪い訳ではないのだが、よくケンカをす
る。

まあ、兄弟喧嘩の様な、ふざけた末のケンカだが、それでお互いを
理解し合っているらしい。

そのせいか、仕事では非常に息が合っていて、良いチームだった。

初仕事はすぐにやってきた。

それは、高速道路の建設に絡んだ汚職だった。

地上本部の建設課長が工事費を水増しし、着服、それを知った部下を殺害したものだっただ。

さらには、その金が一般評議会議員にも流れていたのだ。

「殺しの的は、ケヴィン議員、建設課長、議員秘書のサマンサ、議員のボディーガードが3人や」

「私が議員を殺ろう」

シグナムがそう言った。

「あたしは課長を殺す」

ヴィータが答える。

「私は秘書のサマンサを仕留めます」

シャマルがそう言った。

「俺たちはザコを一人ずつだな」

ザフィーラがリンとアギトにそう言って指示を出した。

仕事が始まった。

職場を出た建設課長が、帰り道を歩いていく。
その後ろを付けていたヴィータが、先回りして待ちかまえる。

「ねえ、おじさんちよつと……」

そう言っただけの人気のない路地へ誘い出した。
そこで突然変身したヴィータは、ラケーテンハンマーを振り下ろした。

それから約1時間後、夜9時になろうとしていた。

議員の事務所に電話が掛かってくる。

「もしもし、あんたの汚職の秘密を知ったんだが、取引しないか？」

近くの公衆電話から掛けたのは、ザフィーラだった。

議員は、ボディガード達に拳銃やドスを持たせて殺す様に命じた。

取引場所の工事現場に現れたのは、ボディガード達と秘書だった。

待っていたのはザフィーラ、そしてザフィーラの背中に隠れる様にアギトとリインが居た。

相手は一人だと思ったのだろう、ドスを持った二人が襲いかかった。

瞬間、肩の上に現れたリインとアギトが、それぞれ魔法をお見舞いする。

一人は凍り付いて砕け散った。

もう一人は、火だるまになって、やがて黒こげの死体となった。

残る一人が拳銃を撃つも、それはザフィーラに弾を掴まれてしまった。

「こんな物じゃあ俺は殺せない」

一瞬にして間合いを詰めたザフィーラは、拳銃を取り上げると、相手の首を掴んだ。

そして、そのまま首をへし折って殺害した。

秘書はその場を逃げ出した。

しかし、その先ではシャマルが待っていた。

少し前の出来事だった。

シャマルは、クラーヴイントに口付けして、ペンデュラムを出していた。

片方のペンデュラムを口にくわえると、キリリリリとワイヤーを伸ばす。

「お願いね」

そう言つて、ペンデュラムを放った。

ペンデュラムは一旦上に向かって飛び、鉄骨を超えるとまた降下して、相手が来るのを待ち構えていたのだ。

秘書を感知すると、飛んでいって一瞬で首に巻き付いた。

一気に締まったワイヤーが、秘書を吊り上げていた。

シャマルの白い指先が、ワイヤーを「ヴン」と弾く、それで相手は絶命した。

議員は間抜けにも、まだ事務所にいた。
あれから、誰からも連絡がないのだ。

コンコン

「誰だ？」

「秘書のサマンサさんのお使いです、すぐに来て欲しいそうです」

ケヴィン議員がドアを開けた瞬間だった。

ズドツッ！

彼の胸を一突きに剣が貫いていた。

「すぐにあの世へ、来て欲しいそうです」

こうして、リィンもアギトも仕事人となったのである。

あれから、1年弱、もう二人は一人前の仕事人だった。
もう誰かに背中を借りるでもなく、堂々と戦う事の出来る、立派な
仕事人だった。

第5話
完

リン&アギト仕事人になる（後書き）

次回は、仕事人誕生秘話

必殺仕事人誕生（前書き）

はやて達が仕事人を始めたのはある事件が切っ掛けだった。

必殺仕事人誕生

「いいよ、どんな地獄だってシグナムと一緒になら怖い事あらへん」

シグナムは、あの日の事を二度と忘れる事はないだろう。

二人で地獄に赴いた日、他の仲間を巻き込んだあの日の事を。

アレは、機動六課が解散してすぐの事だった。

行き場を無くしたはやては、特別捜査官として、興味を持った事件に首を突っ込む様になっていた。

当時、J S事件の影響で、首都防空隊は壊滅状態、アインヘリアルはスクラップ状態、当時の地上本部防衛機能は、AMFバリアと、シグナムにオンブにダッコという、惨憺たる状態だった。

一応、次元航行隊の船が、上空に駐留してはいたが、本格的に攻められていたら、どうなっていた事か？

当時の体勢としては、シグナム以下数十名の隊員で迎撃、ダメなら、フェイト、なのは、そしてはやてを動員すると言う極めてお粗末な作戦しか立てられないで居た。

特に、はやてを使う事は、自分たちにとっても、諸刃の剣だった。はやての魔法は強力すぎるのだ。

彼女はこれまでに、二つの演習場を地図の上から消し去った危険人物であった。

「ゴメン、力抑えたつもりなんやけど、威力出過ぎてもうた」

彼女の最大出力の魔法をテストしようとした際、出力調整を誤ったせいか、演習場を吹っ飛ばし、直径15km 深さ2km にも及ぶ

巨大なクレーターを作ってしまった。

これで、1割程度の力だそうである。
しかもリイン抜きで……

元々リインは、はやてのリンカーコアを半分に分割した上、僅かな血と肉を分け与えて作られた融合デバイスである。
はやては、リインと融合してこそ本来の力を発揮出来るのである。

つまり、本気の20分の1でこの威力である。

これで持っているランクはSS なのだが、どう見てもSSS のそれを遙かに超えていた。

彼女曰く、本気になれば、アルカンシエルでもぶっ放せるというのだ。

そんな物を本気で、地上で使われたら、ミッドチルダという星は、あっという間に人類が滅亡してしまうだろうと言う。

それ以来彼女にはいくつもの通り名が付いた、夜天の魔王、ロード・オブ・ザ・魔王、人間核兵器、管理局の最終兵器彼女、終末の体現者など、

どれも物騒な物ばかりだ。

そんなはやてだからこそ、使える魔法の習得に心血を注いだのかも知れない。

結果は、全くダメだった。

無駄に出力が大きいから、普通にぶっ放しても、どれも甚大な被害が出る物ばかりだった。

それならば、魔法の撃ち方を変えてみた。

砲撃では、とんでもない威力が出過ぎてしまう為、直接注入を試みたのだ。

いくつかの魔法は上手く行った。

シュベルトクロイツの剣十字で、ちくりとやるのだ。

瞬間、魔法を流し込む、流し込まれた人形は石となって砕けたり、凍り付いたりした。

爆発系や、火炎系はそれでも威力が大きすぎて使えなかったが、取り敢えず、石化系が相性が良い様だった。

後は、殺傷性のない幻術系……デアボリックエミッションなら普通に使う事が出来る。

ただし、数百メートルから最大4キロ四方を巻き込むので、巻き込まれた人たちは、全て精神病院送りになってしまいが……

ただ、管理局幹部達の認識は、はやては、あくまで最終兵器であった。

この練習が、後々彼女の仕事に大きく影響を与える事となった。

その事件は、廃棄都市区画に近い裏通りから始まった。

有る麻薬の密売人が、トラブルか何かで惨殺されて路上に放置されていたのだ。

「うあー、これは酷いなあ」

まともに直視出来ないほど酷い状態の死体を見聞しながら、はやてとギンガが話していた。

「この辺りのヤクザの仕業だと思うけど、恐らくは見せしめね」

「やろうね、縄張りを犯された報復か？組に背いたのか？しのぎを出さなかったのか？まあ、そんなところだろう」

「まあ、この人手不足じゃあ、お蔵入りの事件でしょ」

最近この界限では、若者の薬物汚染が問題視されており、この売人もそれに一枚咬んでいた様だ。
一人でも売人が減れば、それに超した事はないのだが、それよりも、大本を一網打尽にしたいと、捜査本部は考えていた。

そんな時、この殺人事件である。

これを切っ掛けに、密売グループを摘発出来れば、麻薬汚染問題はかなり少なくなると思われる。

「何ですと、何故捜査から手を引かねばなんのです？」

ゲンヤ・ナカジマ部長が、モニターに向かって怒鳴っていた。
地上本部の重役からの圧力だった。

何かがおかしい、JS事件後、管理局内は何かのたがが外れた様に、おかしくなりつつあった。

それもその筈である、JSのスポンサーであった最高評議会は、その資金源をマフィアや次元海賊共に頼っていたのだ。

締めていた頭が無くなれば、下の連中は好き勝手放題し始めるのは当然だった。

全ての管理世界及び、管理外世界の駐留職員を合わせると、十数億人が働く巨大霞ヶ関と言っても良い時空管理局は、大半は真面目な公務員である。だが、中には腐った連中もいる。

そう言う連中の中でも、特に最高評議会に近い者たちから黒い噂が聞こえてきていた。

中には、管理局改革を声高に叫ぶ者も居た。

レティ提督は、その代表である。

局内は、事なかれ主義の穏健派、改革派、そして評議会派の三つに分裂しつつあった。

そんな中で、今回の捜査中止命令は、どう見ても、犯罪絡みなのは間違いなさそうだ。

ゲンヤは、取り敢えず捜査の中止をGINGAとはやてに伝えるしかなかった。

だが、はやてはこれに強く反発した。

「なんで捜査したらあかんです？ダメや言われても、一人で勝手に捜査しますからほつといて下さい」

結局、はやては単独行動で、捜査を始めた。

「……と言つ訳なんだよ、危なつかしくて見てられないから、誰かサポートに付いてやってくれねえかな？」

「判りました、主に何かあつては一大事です、私とザフィーラでな

んとかしましょう」

「いや、そうじゃあないんだよ、お前さんとこの主人が負けるなんて事は万に一つもないと思うが、

ぶち切れてでかいのをぶっ放された日にゃ、このクラナガンが消えて無くなるからなあ、そっちの方がよほど怖い」

モニターのシグナムが、眉間にシワを寄せていた。

結局、シグナムとザフィーラが交替ではやてをサポートする事になった。

シグナムは普段は仕事がある為、ザフィーラが通常はサポートに当たっていた。

ザフィーラは、ただのオオカミではない、ある時は警察犬としてオオカミの能力をいかになく発揮し、重要な証拠を発見したり、人の姿になつては、ヤクザ共をあつという間に蹴散らした。

はやては、非常に楽だった、意外なほどに使えるザフィーラが、頼もしかった。

やはり、ただの番犬ではない様だ。

やがて、あの密売人に、家族が、妹が居た事が判った。

シグナムを伴い、その女の子に会いに行ったはやてだった。

相手は、まだ幼かった、彼はこの子を養う為に売人をやっていたのだ。

やっている事は褒められた物ではないが、彼の気持ちはよく分かった。

はやては、非常に辛い役回りをする事になった。

彼女に、兄の死を伝え、何か情報を得る事を余儀なくされたからだ。

「私は管理局特別捜査官の八神はやて言います、あなたのお兄さんが……」

……と言つ訳です、もしお兄さんから何か預かっていたら出してもえんやろか？」

「……何もありません、密売人って何ですか？お兄ちゃんは、一体何をしてたんですか？」

本当に何も知らない様だった、どおやら空振りかと思ったその時だった。

アパートの部屋に強力な魔力弾が飛び込んできた。

咄嗟にシグナムがバリアを張って、はやてを守ったが、女の子は爆発に巻き込まれて、瀕死の重傷だった。

「……ク、クローゼットの中……箱……」

「あかん、今喋ったらあかん、しつかりするんや」

しかし、それが彼女の最後の言葉になった。

「シグナム、犯人を捕まええ！」

飛び出していくシグナム、しかし相手は、強烈な閃光を放って目をくらませた。

「申し訳ありません、逃げられました、しかし、ザフィーラが匂いを補足しているそうです」

近くに待機していたザフィーラは、最初の爆発から敵を感知し、既に追跡に入っていたのだ。

「シグナム、飛行許可を取っておいてや、それとギンガに連絡や」

そう言って、クローゼットの中を漁り始めた。

やはりあった、嚴重に封印された箱が……中には札束と、メモリーチップが入っていた。

現場をギンガ達に任せ、箱を持ってザフィーラの後を追いかけた。

その先では、ザフィーラが困っていた。

ここは、地上本部参事官エルヴェ・ラロック准将の屋敷の前だったのだ。

流石にはやてでも、いきなり乗り込む訳にはいかなかった。仕方なく、一旦退却し、作戦を練り直すしかなかった。

自宅のパソコンで、メモリーチップを開くと、麻薬の密売実態が記録されていた。

犯人はやはり、ラロック准将だった。

彼が、ヤクザを使って麻薬を密輸し、売人を使って売りさばいていたのだ。

はやては、メモリーチップをいくつかコピーすると、一つをフェイトに、一つを本局の刑事課に、更にもう一つを108部隊に送りつけた。

本物は、自宅に保管しておいた。

「さあ、行くよ、シグナム！あの子の敵討ちや、きっちり逮捕するで」

シグナムとザフィーラを伴って、はやては准将の屋敷に乗り込んだ。

逮捕状を見せ、中に入ろうとすると、いきなり魔力弾が飛んできた。

だが、はやて達には通用しない。

恐ろしく頑丈なバリアが、魔力弾を簡単にはじき返していた。

そう、騎士甲冑を身に纏ったはやては、とてつもなく防御力が高いのだ。

「シグナム、あいつを逮捕や」

剣を抜いたシグナムが、斬りかかる。

奇しくも相手も同じ剣のデバイスだった。

ただ相手は、片手で剣を、もう片手で魔法を撃ってくるタイプだった。

非常にやりにくい相手だ、剣を受け止めた所に、魔法を撃ち込まれる。

シグナムも苦戦を強いられた。

こう言う時は、攻撃こそ最大の防御である。

「紫電一閃！」

シグナムの打ち込みは非常に重い、とても片手で受け止められる物ではなかった。

剣を打ち落とされて、そこで勝負があつたかに見えた。

「そこまでだ諸君！」

二階のバルコニーに姿を現したのは、准将だった。

「今すぐこの屋敷から出て行って貰おう、でないとこうだ」

何人かの男達が子供を抱えていた。

その内の一人を、いきなり射殺したのだ。

「何て事するんや、この人殺しが！」

「おや？聞こえなかったのか？出て行けと言ったんだ、それにこんな実験動物いくら殺した所で大した罪にもならんよ？こいつらは、初めから存在していないんだからな」

「……ゆるさん、ゆるさんのや！」

「おっと、この場で砲撃でもするのかな？すればクラナガンの市民を巻き込むよ」

その瞬間だった、はやてはシュベルトクロイツで、准将に斬りかかっていた。

拳銃で反撃する物の、全てバリアに弾かれた。はやての斬撃が、准将の手をかすめた。

「終わりや、あんたあは今死んだ」

「何を言ってるんだね？」

そう言い終わらない内だった。

ビシッ

傷口から石になり始めたのだ。

あっという間に石像と化した准将を、はやては蹴り倒した。ポコッという音と共に、彼は碎けて散った。

「シグナム！」

シグナムは、あの魔導師を斬り殺していた。

そのまま二人は、屋敷内の男達を次々と殺していった。人質を解放する為だった。

そこへ、ザフィーラも加わる、屋敷内はとてつもない惨劇の地獄

と化した。

最後の一人を石に替えた時、屋敷は包囲されていた。

包囲していたのは、レティ提督の率いる精鋭部隊だった。

この時レティはフェイトの上司でもあったのだ。

はやて達は、レティの前に自首した。

「成り行きとはいえ、犯人達を殺害しました」

だがレティは、彼女を咎めようとはしなかった。

「この一件は私が預かる」

そう言ったきり、はやて達に何のお咎めも処分もなかったのである。

それでも、納得の行かないはやては、レティに何度か処分を申し出たが、アレは人質救出の為に、やむを得なかった事だと言われた。あの子供達は、遺伝子操作で生み出されたクローンである事も告げられ、管理局の孤児保護施設に引き取られたと、教えられた。

「じゃあ、このお金はどうしたらいいですか？」

「貰っておきなさい、敵を討った正当報酬だと思えばいいでしょう」

「ええっ？」

「これを見なさい」

それは、ネット放送の97番世界特集だった。
必殺仕事人と言う番組だった。

「まあ、考え方はこれと同じです、どおせ返す当てもないんだから、
ばあつと使ってやった方が良いでしょう」

処分のない事をシグナム達に伝えると、あのお金を分け始めた。

「なあシグナム、私はこの先どおしたらええと思う？」

「判りません、ただ、私はあなたの騎士です、あなたが行く所どこへでもお供させて頂きます」

「もしそれが地獄でもか？」

「はい、喜んで」

「ええよ判った、どんな地獄だってシグナムと一緒に怖い事あらへん、一緒に地獄に堕ちよう」

こうして、ミッドチルダに必殺仕事人が誕生した。

彼女たちは戦い続ける、不当な暴力に泣く人たちの為に

第6話 完

必殺仕事人誕生（後書き）

次回、総元締め様登場。

と言っても以前から出ている人なんですが……

総元締現る（前書き）

姿を現した総元締、それは意外にもあの人だった。

総元締現る

「ちよう出てくるわ」

「こんな時間からどこへ？」

「総元締め在所や、何か大事な話があるらしい」

「総元締めなんて居たのですか？」

「居るよ、まあ存在自体秘密なんやけどな」

はやては、一人で出かけていく、場所は市内のとある居酒屋だった。

座敷に集まった5人、4人は元締めである。

「提督、じゃなかった、総元締め様、護衛も付けずにこの様な場所へ来られるのは、いかがな物かと……」

「護衛なら、既に店の客として来て居るわよ、ある人の紹介で97番世界から5人ほど雇ったから」

「ある人って……丁氏ですか？」

「そう、丁氏よ、丁氏ほどではないにしろ、かなりの戦闘力を誇る護衛だから、安心出来るわ」

「まあ、あの人の紹介なら間違いはないでしょう」

座敷に集まった5人、一人はレティ提督、はやて、サラリーマン風のスーツに眼鏡の男、黒いバリアジャケットにサングラスの男、そして、教会の服にヴェールで顔を隠した女、いずれもただ者ではない。（作：誰だか判るかな？）

「今回集まって貰ったのは、今後の方針について伝える為です」

「今後の方針ですか？」

「そう、今管理局内は三つの派閥に分裂しています、その内の評議会派についてです。」

彼らは、今は無き最高表議会に近い人間達で、マフィアや海賊達との繋がりが深い者たちです。

本当は、血を流すことなく彼らを排除したかったのですが、状況はそうも行かなくなってきました。

もはや管理局は、彼らを排除しない限り、浄化は不可能であると判断しました」

「と言う事は、そう言う人間を片っ端から殺す言う事ですか？」

「結果的には、そうなる可能性も捨て切れません。」

でも、基本的に犯罪が明るみに出た者を始末して欲しいのです。

局内部の事については、こちらから犯罪者のリストと罪状、依頼料を送金します。

後は皆さん自由に仕事をして頂いて結構です」

「自由に仕事も何も、うちはまだ仕事人が居なくて、信用出来る人間を集めている所です」

と眼鏡の男が答える。

「俺は本局を担当させて貰う、仕事人は今訓練中だ」

サングラスの男がそう言った。

「私は、ヴェル力領内を担当するわ、仕事人も3人ほど目途が立っているし、すぐ使える様になるわ」

ヴェールの女はそう言った。

「即戦力はうちだけか、まあええよ、ぼちぼちやるから」

はやてはそう答えた。

「それから、評議会派が仕事人排除の動きを見せています、十分に注意して下さい」

その場はそれで解散となった。

「……ちゅう訳や、どうやシグナム」

「話は分かりましたが、なんと言いますか、上手く利用されているというか、使い捨てられないか心配で」

「例えそうだったとしても、それはそれで仕方ないやろ、私らはもう殺しすぎとる。」

何時地獄へ送られても文句の一つも言えへん、ただ、そうなるまでに一人でも多くの悪人を地獄へ送ってやるだけや、先に行って待つとிரிいうてな？

もう覚悟は出来とる、それにシグナムが一緒なら怖い事あらへんし」

「しかし……」

「それに初めから信用してなかったら、仕事なんて出来へんよ？あの人は信用に値する人やから」

「主がそう言うのであれば、これ以上疑う事はしません」

「大丈夫や、きっと生き残ってみせるから」

「……所で主、真面目な話をしながら揉まないで下さい……」

「いやゝ、この弾力、このヴォリューム、たまりまへんなあ、私のはあんまり育たへんかったし」

数日後、仕事の依頼が来た。

「やっぱ上からの依頼は金が良いなあゝ」

「殺しの的は3人や、地上本部経理課主幹の一人ダニエル・サカモト、同じく税務部税理主幹のヴュー・ランドン、ムーラン・ラロック参事官補佐や」

「ラロックって、まさか……」

「そう、いつぞやぶつ殺したあのラロックの弟や、まだ討ち漏らしがあった言う事や」

「まずは裏取りから行くで」

三人は、エルヴェ・ラロックのやっていた裏稼業を、そっくりそのまま受け継いでいたのだ。経理主幹は金庫番を、税理主幹は脱税と密輸の手助けをしていた。さらには、リストになかった小さなヤクザの組も名前が挙がっていた。

「アルフェーノ一家か……どうしようか？」

「アフターサービス言う事で、こいつらも始末しとこう」

「まずは、アルフェーノ一家、組長以下7人を始末する、一人1殺やで」

「問題は、残り3人や。ムーラン・ラロックは、以前うちらが兄を逮捕しに来た事を知つとるから、ガードが堅いで？」

しかしこいつら、兄が殺されてあれだけ手入れを受けたのに辞めな
いとは、ええ度胸してるで」

「今回は……」

口を挟んだのはシグナムだった。

「今回は、より安全に、より確実に始末したい、まず頭を潰してからザコ退治をする方が確実だと思う」

「なるほどなあ、一理あるわ、で作戦は？」

「ラロックはザフィーラとシャルマルに任す、百年ぶりのアレで仕留めてくれ」

「解ったわ」

「経理主幹は、ヴィータだ」

「解った」

「私は税理主幹と組長を殺る」

「残りのザコはみんなで片付けよう」

仕事が始まった。

その夜

ムーランの屋敷の屋根の上に、シャマルとザフィーラが現れる。

「クラールヴィントお願いね」

ペンデュラムがムーランを探し始める。

「居た、二部屋向こうの2階だわ」

シャマルは、部屋の上まで来ると、ペンデュラムのワイヤーでサークルを作る。

「旅の鏡」だ、現れた黒い空間を、ムーランに気付かれない様に彼の体とリンクさせる。

「良いわよ、ザフィーラ」

黒い空間にザフィーラが手を突っ込んだ。

屋敷の中ではムーランが苦しみ始めた。

そのまま血を吐いて絶命した。

それもその筈である、ザフィーラは彼の心臓を握り潰していたのだから。

経理主幹は、ムーランの屋敷に向かって歩いていった。

屋敷の手前の路地へさしかかった時、鉄球が飛んできて地面で跳ねた。

跳ねた鉄球は、彼の股間を下から直撃した。

「ふっ、ゲートボールの奥技は、球でタマを打ち抜く事にある」

ヴィータは、泡を吹いて倒れた彼を路地の奥へ引きずっていくと、

そこでラケーテンハンマーを振り下ろした。

「シュワルベフリーゲン何て恐ろしい技だ」

屋根の上から見ていたザフィーラが青ざめていた。

一方税理主幹も、同じ屋敷に向かっていた。

犯罪者というのは、人通りを嫌う、彼のミスは全く人通りのない道を歩いていた事だった。

向こうから女が一人歩いてくる。

ピンクのポニーテールの女だ。

それはすれ違いざまだった。

すれ違いざまに剣を抜いた彼女は、後ろから一太刀浴びせたのだ。まさに一太刀だった。

彼は袈裟に斬られて絶命した。

次はアルフェーノ一家だった。

突然、克ち込みを掛ける様に事務所になだれ込んできた一団は、組長を斬り殺し、組員達をあつという間に殺していた。

有る者は凍らされて木っ端微塵に碎かれ、有る者は火だるまになり、或いは首をへし折られ、またある者は極細のワイヤーで首を刎ねられていた。

他には、頭に四角い穴が空いた者、石になって碎かれた者など、様々だったという。

「なあシグナム、なんであいつら何時までも悪い事を続けとるのやろ？」

あの時辞めてたら殺されずに済んだかも知れへんのに、なんで今まで続けていたんやろうか？」

「判りません、でもあいつらは、なんの為にそれだけの金を集めようとしたのか？考えるべきなのではないでしょうか？」

「なんの為に？か……」

第7話 完

総元締現る（後書き）

次回の主役はフェイトさんです。

フェイト激怒する（前書き）

哀れな子供達を見てしまったフェイト、その怒りが彼女を修羅に変える。

フェイト激怒する

ここは、管理局児童保護施設、フェイトはここへ遊びに来るのが何よりの楽しみだった。

実は、最近気になる子がいるのだ。

出来ればもう一人、保護責任者になって引き取るうか？キャロやエリオの弟に迎えようか？

などと考える日々が続いている。

彼女にとって、最も幸せな時間である。

「フェイトさん、また何をニヤニヤしてるんですか？」

部下のティアナに突っ込まれる。

「何か良い事有るんですか？」

「判る？実はもう一人、家族に加えようかと思ってる子がいるの」

「あーそっち方面にのろけないで下さい」

ザクッ

「フェイトさんもいい年なんですから、そろそろ結婚とか考えた方が良くないですか？」

ドスッ

「そんな事してると行き遅れちゃいますよ」

ズドッ

「なんでそう言う事言うの?」

「だって言つとかなないとこれが最後になりますから、私、来月から独立しますので、これが最後になるんです」

そう、ティアナは執務官試験に晴れて1発合格し、来月から独立するのだ。(因みに、フェイトさんは2回滑りました)だから、今の内に言える事は言っておかないと、また何時会えるか分からない。

少々の憎まれ口も、ご愛敬である。

執務官とは、捜査官(刑事)と検察官、裁判官を兼ねた役職で、とてつもなく過酷な職業である。

捜査中の戦闘で命を落としたり、その後の書類作りに悩んで体を壊す者も非常に多い。

それでも一般捜査官の3倍以上の給料と、年金の率の高さ、局の保養施設を優先的に使えるなどの特権が認められていて、非常に魅力的な役職でもある。

また、有休も自由に取れる。

一つの事件を解決すると、1ヶ月前後有休を取る執務官が標準的である。

ただ、フェイトやクロノの様にろくすっぽ休暇を取らず、回りを馬車馬の様に使い回す執務官はほとんど居ない。

この二人の下に入って捜査や仕事をさせられた者は、7割方、他の上司に泣きつき、2割は辞めるとさえ言われている。残りの1割は、自殺するか精神病院行きだそうだ。

この二人の事を、管理局の鬼兄妹と陰で囁く者もいる。
そんなフェイトの下で鍛えられたティアナは、エリート街道まっし
ぐらの執務官として囑望されている。

「そっか、ティアナはもう卒業しちゃうんだね」

ちょっと残念なフェイトさんだった。

「マルレオ君って言うの、4才の男の子」

ティアナの送別会を兼ねて、市内の居酒屋に居た3人、フェイト、
シャーリー、ティアナはいつの間にかそんな話になっていた。

「早くしないとすぐ養子に出されちゃいますよ、最近あそこは所長
が替わって、凄く回転が速くなったそうです」

「そそそうなんだ（汗）」

シャーリーの話に、ちょっと焦ったフェイトだった。

シャーリーは、フェイトの補佐として非常に優秀だった。
ただ優秀と言うだけでなく、局全体に非常に顔が広く、フェイトの
欲しい情報や、噂話を信じられないほど大量に集めてきてくれる。
そして、信用度の高い情報しか、フェイトに話さないのもシャーリ
ーの特徴である。

「でも、変な噂があるんです、養子に出された先の情報が全然入っ

てないとか、
家族ごと行方不明とかそういう話があるんです」

フェイトの顔色が変わる。

「ごめん、ティアナ、ここでお開きにするわ、シャーリー、すぐに仕事よ、もしかすると大きなヤマになるわ」

シャーリーの話に事件の匂いを感じ取ったフェイトだった。

フェイトはまず児童保護施設へ足を運んだ、マルレオ君以下15名が養子に出されたと報告があった。

しかし、里親の情報が全てでたらしめだった。

子供を引き取りに来た親というのも架空の人物らしく、調べてみれば存在しない人間だった。

「里親が行方不明になったんじゃない、行方不明なのは子供だけだ」

フェイトは焦っていた、何か非常にイヤな予感がする。

子供達にもし万が一の事があつたら、ついそんな事を考えてしまう。手掛かりが掴めないまま、時間だけが過ぎていく。

そんな中、フェイトは、児童保護施設所長グラウヴに目を付けた。彼が所長になってから、施設の回転率が急速に上がっている。数多くいた子供達が今は、以前の3分の1ほどだ。

彼の身辺調査を始めると、すぐに上から圧力が掛かる。

直属の上司であるレティではない、もっと上の高い所から、捜査を中止せよという圧力が掛かった。

何かがおかしい、まるで管理局の上層部は犯罪者でも庇っているかの様だ。

でも、このままでは、子供達を救えない。

フェイトは、シャーリーを捜査から外し、単身隠密行動を開始した。

グラヴィは、元魔法科学局の人間だった。
捜査の為、マリエル技官と接触する。

グラヴィの上司で現在の魔法科学局局长は、嘗てのフェイトの母、プレシアⅡテストロッサの上司でもあったオッペンハイマーⅡクレイテンであった。

そして、マリエル技官の口から語られたのは、局内が三つに分裂している事、今フェイトが調べているのはいずれも評議会派のメンバーである事などだった。

オッペンハイマーⅡクレイテン、嘗て第4技術開発局を崩壊寸前まで導いたマッドサイエンティストである。

彼とプレシアが行った実験は、プレシアの娘であるアリシアを死に追いやり、クラナガンの3分の1を廃棄せざるを得ないほど荒廃させたのである。

それと同時に、民間会社の名が上がってくる、社名をE&Mバイオ

テック社という。
クレイテン博士は、この民間会社と何らかの繋がりがあるらしいかった。

一旦オフィスに引き上げると、シャーリーが情報を集めて居た。
シャーリーは、捜査から外された直後から、フェイトの有給を申請して、自分は暇なので局内をふらふらと歩き回って昼行灯を演じていたのだ。
おかげで、局内では上司が居ないとすぐサボる女として有名になりつつあった。

シャーリーはただ歩き回っていた訳ではなかった。
顔見知りを見つけると、ぐだぐだと話をしつつ、必要な情報を引き出していたのだ。
やはり、局内は3つに分裂していた。
それだけでなく、評議会派はマフィアや次元海賊と繋がりが深く、ほとんど次元犯罪者と言っても良いほどである事、
E & M バイオテック社という会社の、クラナガン西研究所の職員が、子供達を連れて行った里親に酷似しているなど、極めて重要な物ばかりだった。
それだけでなく、最近、必殺仕事人と称される連中が、数多くの犯罪者を殺しているという話もあった。

実際フェイトが居ない間に、評議会派の重役から仕事人探索の依頼が来ていたのだ。
シャーリーは、フェイトが帰ってくるまでは、仕事はしない方針で返事をしておいたのだ。

「仕事人捜しはキャンセルしましょ？」

私は数日以内にE&Mバイオテック社のクラナガン西研究所に忍び込んでみるから、

それまでは休暇申請を延長しておいてね」

二日後、フェイトはE&Mバイオテック社のクラナガン西研究所に忍び込んで居た。

施設は、巨大だった、なんの研究をしているのか分からない、いろいろな研究設備で埋め尽くされている。

そして、その中に見つけてしまった。

何らかの人体実験の揚げ句、標本にされ薬品漬けとなった子供達を、見るも無惨な姿となったあのマルレオ君を。

フェイトの幸せな妄想は、脆くも崩れ去った。

がつくりと落ち込んで床に手を突いた。

涙が溢れて止まらなかった。

彼女が顔を上げた時、それはいつもの彼女の顔ではなかった。

憎しみと怒りが、彼女を修羅に変えていた。

もはや捜査など、どうでも良かった、ここにいる全員斬り殺してしまおうと心が叫んでいた。

バルディッシュをハーケンセイバーモードで起動し、最初の一人を見つけて、後ろから近付いた時だった。物陰から出てきた手に引きずり込まれた。引きずり込んだのは、はやてだった。

「酷い顔や、これ見てみい」

見せられた手鏡には、とても自分とは思えない、恐ろしい顔の女が映っていた。

「それがフェイトちゃんの本性や、恐ろしいなあ？

だけど、それを超える厳しさがないまま人を殺したら、その瞬間から自分の地獄が始まるで？

ここは一旦引くんや」

はやてに窘められて、引き上げたのは、はやて達の自宅だった。

「あの子の敵は、私が討たなきゃならないの、他に敵を討ってくれる人なんて……」

「そのために仕事人がおるんや」

「えつつ？」

はやての顔が違う、今までと比べ者にならない厳しい顔だ。そして、札束を取り出した。

「受け取るか取らないか？受け取ればもう後戻りは出来へんよ」

「はやてちゃんまさか……」

「そのまさかや、どおする？」

フェイトは迷った、それ以上にショックだった。

まさか親友が仕事人だったとは、そして今、自分も同じ道に入ろうとしている。

それでも、敵は討ちたい。

伸びかけた手が躊躇し、また伸びる。

札束を掴んだ時、彼女の心は決まったのかも知れない。

「殺しの目的は、魔法科学局局長オッペンハイマー・クレーテン、児童保護施設所長グラヴ、E & M バイオテック社のクラナガン西研究所の所長以下研究員40名や」

「局のお偉いさんはガードが堅いで」

「私は、グラヴを討ちます」

フェイトはそう答えた。

「じゃあ、シャマルとザフィーラでクレーテン博士な」

はやては、そう指示を出した。

「残りのザコはみんなで行くよ」

仕事が始まった。

グラীবは、帰宅途中だった。

彼の自宅がクラナガンにあったのは好都合だった。

自宅近くの人通りのない路地だった。

空中に、髑髏の、死神の面を着けた女が浮いていた。
手には死に神の鎌ハーケンセイバーが握られていた。

彼は、彼女の姿を見た時全てを悟ったのだろう、自分のやってきた事の付けがやってきた事に。

「グラীব所長覚悟！」

瞬間、死神は、彼の首を、命を刈り取っていた。

イカレた博士は、オフィスにいた。

突然苦しみ出すと、血を吐いてそのまま絶命した。

隣の部屋に忍び込んだシャマルとザフィーラの仕事だった。司法解剖の結果は、心臓破裂だったという。

研究所の前にシャマルとザフィーラ、フェイトが合流して、突入体制は整った。

「しかし警備が多いな」

「あの人達は関係ないからね」

「正面玄関が6人、裏口が4人か」

「あたしに任せて貰おう、シュワルベフリーゲン」

4個の鉄球が、4人の警備員の股間を打ち抜いた。泡を吹いて倒れる4人、

「今の内だ」

裏口から侵入した一団は、とてつもない早さで、殺戮の嵐を吹かせていった。

表の警備員が気付いた時には、全員が殺されていたという。

「なあフェイトちゃん、フェイトちゃんはこちらのチームに入れる訳には行かんのよ？」

まだ、仕事人が居ない元締めがあるから、そちらで仕事をお願いするわ」

「お久しぶりですフェイトさん」

「まさかあなたが元締めだったなんて」

はやての紹介で引き合わされたのは、グリフィス君だった。

「一体これはどうなっているの？」

「それは追々説明します」

こうして、フェイトさんが仕事人に加わった。

第8話
完

フェイト激怒する（後書き）

スカリエツティがオッペンハイマー＝クレ－テン博士の秘密を語る。
そしてフェイト出生の秘密とは？

スカ博士語るt o フェイト（前書き）

スカリエツティが語る、オープンハイマール＝クレーテンの秘密、
そしてフェイト出生の切っ掛けとは？

ス力博士語るt o フェイト

47番世界軌道拘置所、希代の変態科学者はそこに捕らえられていた。

JS事件を起こしたテロリストとして、12人の女性を意識を奪った上で次々と妊娠させた史上最悪の性犯罪者として名を馳せる男、それがジェイル「ス力リエツティ」だ。

「ス力リエツティ、今日はあなたに聞きたい事が有ってきました」

「おや、フェイト」テストロッサ君、久しぶりだねえ、一体何の用だね？事件の事については答ええないよ」

「今日は、事件の事で来たのではありません、単刀直入に聞きます。オッペンハイマー「クレイテンと、どの様な関係だったのか？、彼は何を研究していたのか？

グラীবと言う男については何か知っている事は？、以上3点についてお答えください」

「なんだ、そんなことの為にここ迄来たのか？随分ご苦労な事だ」

「そんな事とは何よ」

「良いだろう、答えてやろう、まずグラীবだが、奴は小心者でね、いつもクレイテンの鞆持ちをしていた男だ、取るに足らない存在だよ、ゴミ以下だ」

確かにゴミ以下だった、それをフェイトが始めたのだ。

「クレイテンは、私のスポンサーの一人だよ、レジアス同様、欲の皮の突っ張った奴だった。」

奴はね、私の研究の一つを自分の物にしようとしていたんだ、だから間違った数値のデータを渡してやったんだよ、結果は君の知っているとおりさ、

ろくにデータを検証しないで実験するから失敗したのさ」

「失敗ってまさかあの暴走事故？」

「その通りだ、アレで君が生み出される切っ掛けになったんだよ、感謝して欲しいものだな」

「あの技術はねえ、正しい数値で行えば必ず成功するという所まで完成していたんだよ。」

尤も、金と時間がなかったのでまだ実験していなかったがね」

「あの暴走事故の研究内容は、なんだったの？」

「時間跳躍転送。君も知っているとおり、どんな魔法を使おうが、どんな科学技術を使おうが死んだ人間は生き返らないし、時間は逆行出来ない。」

だが、過去に存在したものを、未来の世界に転送出来るとしたらどうする？

アルハザードその物をここに持って来られるとしたらどうする？それが一つ目の答えだ」

「一つ目って、まだあるの？」

「奴は人間兵器についても研究していてね、そのためにかなり多くの人間を人体実験に使用していたはずだ」

「ありがとう、それだけ聞ければ充分だわ」

そう言つと、さつさと帰つてしまつたフェイトだつた。

「充分つておい！これからが良い所なのに！こら、人の話を聞け！」

最近ほ、ろくに取り調べもなく、誰も声を掛けてくれないので、もの凄く寂しかったス力さんなのだつた。

「なるほどなあ、そうすると、狙いはアルハザードだつた言う訳か？
そうすると、評議会派のお金の流れが見えてくるわ」

「どういう事？」

「今まで殺してきた人間の中に、評議会派の人間も何人かいたんよ、
だけど、彼らの集めたお金がどこかへ消えていた。

一体何の為にお金を集めるのか？どこに注ぎ込んだのか判らなかつた言う訳や。

でも、もしアルハザードがこの世界に現れたらどうなるか？想像するだけでも恐ろしいわ」

「ただ彼らの計画は、少しだけ遅れるはずよ、クレイテンが死んだ

から」

「今の内に評議会派を叩いて、計画を潰してしまわないとえらい事になりそうやな、上に報告しとくわ」

数日後、集まる元締め達、

「なるほど、そう言う事ですか？よく調べてくれました」

「まだ、話がよく見えてこないんだが？」

「つまりこういう事や、過去には行けへんけど、未来には行ける言う理論を応用して時間軸をずらすと、過去にあった物を現在へ持つてこれる言う事になる。それを利用して、アルハザードを持って来よう言う訳や」

「つまり、その理論自体は完成している物の、正確な数値自体は判っていない可能性もあるのね」

「その可能性は高い、けど……もし、スカリエッティが喋ってしまったり、

その数値自体を割り出されてしまったら大変な事になる」

「判りました、こちらでは、評議会派の全容と、どこまで実験が進んでいたのかを調べてみます。

皆さんは、取り敢えずお仕事を頑張ってください」

「そう言う訳やシグナム、この先の戦いは相当キツイ物になるよ、覚悟しといてな」

「判りました、主、そう言う真面目な話をしながら揉むのはやめて下さいと……」

「これがええのに、それともっと凄いことするか？」

「ベッドに枕が二つって……」

ゴンッ

「あいたー、何すんねん」

「ここは18禁のページではありません、そう言う事は出来ないんです」

「何も叩かんでもええやねん」

「でも、この所頼み人も減ったし、上からの依頼も少ない、少し平和になったとちゃう？」

「そうですね、これで少しずつ平和になってくれれば、言う事は無いのですが」

だが、現実がそれを許さない……

第10話へ続く

スカ博士語るt o フェイト（後書き）

次回は、はやてとスカリエッツィが語ります。

ス力博士語るt。はやて（前書き）

はやてがス力博士の理論の矛盾点を指摘する。

その結果、とんでもないミスがあつた事が発覚する。

このままでは世界が滅んでしまふ！さあ、大変だ！

ス力博士語るt。はやて

「なあ、フェイトちゃん、ス力博士のあの理論、ちょっとおかしいのとちゃう?」

「おかしいって何が?」

「シュレディンガーの次元存在確率論って知ってる?」

「何それ?」

「同一時空間内に、同一個体が二つ存在する事は出来ないって言う定理や。」

次元航行隊の船も、転送機もこの理論に違反しないから機能するけど、あの理論はどう考えても違反しとるのよ」

「だから何それ?、難しい事はよく分からないし……って言うか、はやて、よくそんな難しい事知ってるよね?」

「いや、小学生の頃暇やったかな?」

シャマルの大学の教科書を見てな、覚えてしまったのよ、リハビリの日はやる事無かったし」

そう、はやては小学校4年生までは、学校に行っていない、学校に通い始めた4年生の内、半分程度しか出席していない。

休んだ日は、リハビリのある日だった。

でも1日2時間のリハビリである、どうしても時間を持て余してしまった。

そのうちに、シャマルの大学の教科書を見る様になり、かなりの知

識を吸収していた様で、

5年生になる頃には、成績は常にトップクラスだったのだ。

「所で、こちらの世界に次元存在確率論って学問はあるのかな？」

「判らないけど、ユーノかクロノに聞いてみたら？」

聞いてみたが、やはり解らないという。

こうなるとやはりス力さんだろう、はやては面会に訪れた。

「こんにちは、ス力博士」

「なんだそれは、ジェイル・スカリエツティ様と呼べ」

「長いし言いにくいやん、ス力博士でええやん」

「事件の事なら話さないぞ」

「事件の事はええねん、今日はこの前フェイトちゃんに話した理論が間違ごつとる言う事を言いに来たんや」

「間違っているだど？私の理論は完璧なはずだ、ミスなど有るはずがない」

「じゃあ、次元存在確率論って知つとるか？」

「次元存在確率論？なんだそれは？」

「やっぱりなあ、じゃあこれを見てみ」

そう言って手渡したのは、シャマルの大学の教科書を抜粋した物だった。

「ふむ、面白そうな理論だが……」

読んでいく内に、スカ博士の顔が青くなっていく。

「済まないが何か書く物を貸してくれないか？」

何か猛烈な勢いで書き始めたスカ博士、いろんな公式やら、数字やらが踊る。

「何て事だ、これじゃあ私が支配する世界が無くなるではないか？」

「どういつ事や、って言うかまだそんなアホみたいな事を考えとったのかい？」

「私の理論は完璧だ、アルハザードはこちらに呼び出せるだろう？……だが」

「だが、なんや？」

「呼び出した後どうなるかまで、考えていなかった」

「その後どうなるんや？」

「存在衝突という現象が起きる」

「存在衝突ってなんや？」

「存在衝突とは、同一時空内に同一個体が二つ以上存在出来ない場合、パラドクスを解消する為に、一つの個体がもう一つの存在を消滅させようとして衝突が起きる現象だ」

「衝突が起きるとどうなるの？」

「途方もないエネルギーが放出される、それもこの次元世界全てを消滅させられるほどに」

「よく分からんなあ」

「そりゃそうだろう、例えば、物質衝突による反応消滅が起こったとして、1gのアルミニウムが反応消滅した場合のエネルギーは、およそ10万トンの海水を1秒で蒸発させるほどだが、存在衝突の場合はその 10×10 億乗倍のエネルギーが発生する」

「そんな事言うたら、一円玉一つで星一つ吹っ飛ばせるやん」

「その通りだ、ただそれだけじゃあない、その最初に衝突した物と存在が繋がる物が全て連鎖反動的に誘爆する。」

つまり、アルハザードと繋がりのある物全てが存在衝突に連鎖して、反応消滅を起こす」

「ってことは、ミッドチルダは滅びると……？」

「そんな生やさしい物じゃあない、存在の力はその物が回りに与えた影響によって更に大きくなるんだ。

つまり、私も、ナンバーズ達も、君も私に係わった全てがアルハザードと繋がってしまっている、

その全てが反応消滅を起こすんだ。

その光景を見てみたい物だが、見る事は叶わないだろう」

随分というか、もう凄すぎて話にならないほど、えらい事態になっていた。

「こりゃやばいで、はよ帰ってなんとかせんと……博士今日はありがとな」

「こちらこそ礼を言わなければならない、実に有意義な思考が出来たのだから」

元締め達が緊急招集される。

「……以上、話した通りや」

「ってことは、実験が失敗するよりも、成功した時の方がやばいって事か？」

「そおや、成功した瞬間、まずロストログアから始まる存在衝突は、あつという間にこの世界全て誘爆的に消滅させてしまうやろ」

「困りましたね、クロノ提督は、悪人退治は止めて研究施設の探索、破壊、研究データの破棄などを第一に動いて下さい、教会チームは他のチームのバックアップをお願いします」

レティ提督は、そう指示を出して、その場を解散した。

「……ってことや、シグナム」

「恐らく、地上本部だけでなく、本局のお偉いさんも何人かは、殺さなアカン言う事になるやろ」

「またえらく難しい話になりましたね、それにもし、実験されたら最後、全ての世界が無くなってしまいますね」

「私たちも消滅するし、死ぬよりもっと酷いかも知れへん」

深刻な事態が待ち受けていた。

第11話へ続く

ス力博士語るt。はやて（後書き）

次回、評議会派が動き出す。

動き出す巨悪（前書き）

どうしても仕事人を始末したい評議会派のメンバーが動き出す。
そして、……

動き出す巨悪

午後3時、教会はお茶の時間である。

「カリム様、今日はカモミールティーにしてみました」

「良い香りです、お茶の入れ方が随分上手くなりましたね、オットー」

「ありがとうございます」

そう、海上保護施設を出たセイン、オットー、デイドの3名は、教会に引き取られていた。

これからは、教会騎士として、シスターとして生きる道を選んだのだ。

でもまさか、裏稼業までさせられるとは思っても見なかった。

「下がって良いですよ」

今日は、はやてにシグナムも呼ばれていた。
ついで言うなら、ヴェロツサもいる。

楽しい会話が続く内、何時しか話に変な方向にずれていく。

「私たち教会騎士は、結婚が許されていませんが、はやては出来る

「のだから、そろそろ考えなさい」

「結婚言われてもなあ、まだ考えても居ないし、するとしても相当出来た人でないとアカンわあ、
うちは小姑みたいなのがいっぱいいるから」

「あら、つてことはお嬢さんですか？そこに、良い候補がいますよ」

「ね、義姉さん、やめてよ」

「あら、私がしっかり教育してあげるわよ、嬢殿」

「シャッハさん、それは止めて下さい」

「これ嬢殿！」

どつと笑いが起きる。

「冗談はこの辺にして本題や、ロツサ、まだ研究施設は見つからないの？」

「まだ手掛かりさえ掴めない、せめてオープンハイマール・クレートの死体を調べられれば、
情報を引き出す事が出来たかも知れないけれど、
死体は奴らが回収してしまったし、すぐに処分されてしまって手の打ちようがなかったよ」

「彼の部下は？」

「部下は今のところガードが堅くてねえ、簡単には調べられないよ。おまけに、本部ビルのAMFバリアの内側は、完全なAMF空間にされてしまつて、

デバイスの持ち込みも厳しく制限されているし、魔法を使う事さえ出来ない始末さ、

オッペンハイマー「クレイテンが死んだ事で、相当に警戒されている様だ」

「うーん、随分動きづらくなつたなあ」

二日後、地上本部ビル内にて

その日、ターナー刑事部長は地上の精鋭を集めていた。

「良い事あなた達、仕事人達を必ず捕らえるのです！」

はやては思つた、何故この男はしゃべりがおすぎなのだろう？と

……

「何故、仕事人対策を急ぐのですか？市内では他にも凶悪な犯罪が起きてそちらに捜査の手を取られているのに、今更何故ですか？」

誰かがそんな質問をする。

「上からの命令です、命令は絶対なのよ！」

そう、評議会派はかなり焦りを感じていた、何時自分の首が狙われるやら分らないからだ。

はつきり言って、今の職を退けば命を狙われる確率は低くなると言うのに、懲りない奴らである。

「私は、改革派なので、今回の件に関しては自分の好きにさせていただきます」

そう言って退室したのはフェイトだった。

「私もや」

はやてが出て行く。

「教導隊は全員、穏健派という立場を取らせていただいだ来ます」

なのはも退室した。

雪崩を打った様に、次々と退室していき、僅か数名の捜査官や執務官が残っただけだった。

残ったのは、よほど真面目に命令を遵守する人間か、評議会派だけであった。

ターナー刑事部長は思った、これで左遷は確実、もう人生終わつたと……（作：中間管理職は悲しいねえ）

残ったのは、真面目で頭の固い穏健派の執務官が一人、評議会派

の執務官が二人、同じく捜査官が4人であった。評議会派は、非常に柄の悪い、殺人さえやってのける様な奴ばかりだった。

今回の、退室事件は各方面に大きな影響を及ぼした。局内は完全に三つに割れた。大半が、穏健派と改革派に流れ、僅かばかりが評議会派になったのだ。

また、地上部隊もまるごと改革派や穏健派を表明するなど、既に管理局機能が麻痺し始めていた。だが、管理局の重役ポストには、評議会派が多く、人事問題など、管理局機能の麻痺に拍車を掛ける結果となった。

局管内は、穏健派が五割、改革派が4割、評議会派が1割という勢力分布に代わりつつあった。当然、面白くないのは評議会派の重役達だった。その上、もしかしたら命を狙われる可能性があるのだ。もう、悠長な事はしていられない、せめて仕事人の一人でも捕らえて、自分たちの安全を確実な物にしたかった。

そんなとき、評議会派の執務官が、とんでもない作戦を立案した。ならず者達を市内で暴れさせ、死亡者を出す、それを餌に仕事人をおびき出して、まるごと殲滅するという物だった。当然、穏健派の執務官が反対した。

「うるせえよじじい、死ねや！」

いきなり刺された。

こうして、捜査本部はまた一人、人数を減らした、その上作戦に反対したターナー刑事部長は、監禁されてしまった。

数日後、何十件もの強盗容疑で有名な犯罪者グループが、とある執務官と接触していた。

「お前達は、明日市内で何人かを殺して逃げろ、隠れ家は準備してある」

密約が交わされていた。

第12話へ続く

動き出す巨悪（後書き）

次回は、ヴァイスⅡグランゼニックが仕事人に加わります。

ヴァイス絶叫（前書き）

評議会派の執務官による卑劣な作戦により、妹を失ったヴァイスが悲痛な絶叫をあげる。

そして彼は仕事人に加わった。

ヴァイス絶叫

その日、クラナガン市内には、数多くの覆面捜査官が配置されていた。

実はあの密談は覗かれていたのだ。

ただ、襲撃の正確な場所と時間が分からない、それ故通報を受けた108部隊や、なのは、シグナム、ヴィータと言った精鋭達までが変装して市内に張り込んでいたのだった。

覗いていたのは、ヴェロツサ「アコース査察官である。

だが事件は起きてしまった。

人出が多くごった返す繁華街にトラックで乗り付けた3人は、突然にマシンガンを乱射して次々に市民を虐殺し始めた。

すぐにシグナムが駆け付けけるが、もう既に30人近くが倒れていた。

「臥龍一閃！」

犯人達はあっという間に、手足を切り飛ばされて逮捕された。

「ラグナ！おいしっかりしろ！おい！」

ヴァイス「グランセニックだった。

彼の妹は、友達と出かけてきていたのだが、この事件に巻き込まれたのだった。

彼も、まさか自分の妹が来ていようとは思わなかったのだろう、し

かも目の前で撃たれて倒れたのだ。

「…………おにいちゃ…………ん？」

鮮血に濡れた手を、彼の顔を確認するかの様に差し伸べるも、それは叶わず崩れ落ちた。

「ラグナああああああああ！」

彼の悲痛な絶叫が、ビルの谷間に響き渡った。

結局、21人が犠牲となり、7人が入院する大事件となった。しかも、犯人達を引き渡すよう、評議会派の執務官がしつこく申し入れてくる。

「人のヤマを横取りしないで欲しいわね！」

フェイトがそれをつっぱねる、ぎりぎりの攻防が続いていた。

「フェイトちゃん、あいつらまだ吐かんか？」

ここは108隊隊舎特別留置室、取り調べが続いている。

「なかなか頑固者ね、簡単には口を割らないか…………」

「じゃあ、ロッサ、お願いや…………」

ヴェロッサが、3人の頭にそれぞれ手をつ突っ込んだ。

「オルネライア執務官……それ以外は、全て適当に市内を襲撃する様指示されただけだ、他には何も知らされて居ない」

「じゃあ、こいつら使い捨てか？困ったなあ、親玉が知りたかったやんやけど……そうや、良い事思い付いた」

「主、危険です、護衛も付けずに彼らの所に乗り込むなんて」

焦るシグナムに、はやては落ち着いていた。

「護衛ならおるよ、よく見てみい」

彼女の陰から一人の老人が出てきた。

「えっ、今どこから出てきた？気配すら感じなかった」

「この人は塩谷さんゆうてな、レティ提督の5人の護衛の一人や、高町士郎はんが、素手同士だったら負けるかも知れへんゆうてた人や」

「なっ!?!」

高町士郎、久しく忘れていた名前だった。

10年前、彼女は「軽い模擬戦」で士郎氏に完膚無きまでにフルボッコにされたのである。

しかも、指一本触れる事も出来ずにである。

その士郎氏に勝てるかも知れない使い手とはとんでもない化け物だ。

シグナムの血がうずく。

「ちょっと試してみるか？本部ビルの中はAMF空間や、デバイスや武器の持ち込みも魔法を使う事も出来へん。

その中で使える護衛ゆうたら、素手による格闘技だけやる」

シグナムと塩谷氏が向かい合う、先に動いたのはシグナムだった。まっすぐ突進すると見せかけて横ら殴りかかった。

しかし、その拳が当たるかと思った瞬間、投げられていたのはシグナムだった。

何がどうなっているのか全く分からない、とにかく殴れば投げられ、掴みかかれれば抑え付けられていた。

まるで幻術を見せられている様だ、恐らく、レバンティンを抜いたとしても勝てないだろうと、彼女の本能がそう訴えていた。

塩谷九段、60才、大東流合気柔術師範、とてつもない化け物だった。

1時間後、本部ビル内、オルネライア執務官室

「あいつらが吐いたで、あんたから指示を受けたゆうてな、今逮捕状を請求するさかい明日には逮捕や、覚悟しときい。

それから、あんたの名前、遺族の方達にもリークしといた、もしかしたら仕事人に殺されるかも知れへんなあ」

「一体何がお望みなのですか、八神捜査官」

「別に何も望んでなんか無いよ、ただ、あんたは終わったと言いに来ただけや、

拘置所に入るのが早いか、殺されるのが早いか二つに一つや」

「そうですね？それは残念だ、でも俺もただでは捕まらんよ、それに君も軽率だ一人で俺の部屋に来るって言うのはね」

瞬間ドアを開けて5人が入ってくる。

「まあ、捕まるまでゆつくり楽しませて貰おうか？」

「なるほど、その5人がグルだった言う訳やな？それに、私一人とちやうで」

彼女の陰から、一人の老人が姿を現す。

「こいつどこから出てきやがった？」

「あれ？今まで気が付かなかったのかいな？この人の魔法にも気が付かんとは、相当弱いんとちやう？」

「馬鹿な、ここは完全なAMF空間だぞ、そんな馬鹿な事が出来る訳無いだろう？」

「それが出来るんよ、97番世界には魔力を使わない魔法が存在するよって、あんた達に勝ち目はないよ」

「こなくそ！」

一人が殴りかかった。

しかし、殴った本人は直後に壁にめり込んだ。

「次に痛い目に遭いたい人はいるかな？」

老人にそう言われた時、誰も勝てる気がなかった。

「じゃあ帰らせて貰うわ、明日の夕方逮捕に来るよって、楽しみに待つとりい」

「不味いな、逮捕状は俺たちで遅らせるとして、お前はここを出るなよ、仕事人に狙われるぞ？」

オルネライア執務官は、オフィスを出る事が出来なくなった。

「俺たちは、今夜中にあの女を殺してやる」

もう一人の執務官、サシカイアがそう言った。

同日夕方

「主、今夜来るといふのは本当ですか？」

「恐らく来るよ、私を殺しに……本気の殺し合いになるから、覚悟してや」

その直後だった、6人の始末依頼と、お金が送られてきた。
総元締めからだった。

「どおやら仕事やね、5人は迎え撃てるけど、オルネライア執務官はどうしよう？」

もし来なかったら仕留められんよ？AMFの中じゃあザッファイは犬のままだし、シグナムの剣は持ち込めないし」

「俺に任せて貰おう」

入ってきたのは、グリフィスとヴァイスⅡグランゼニックだった。

「妹の敵、俺に取らせてくれ」

「でも、ストームレイダーじゃあ何も出来ないんよ」

「この仕事にストームレイダーは使わねえ！俺のコレクションから、実弾のライフルを使うつもりだ」

「あの本部ビルは無理やて、50mm 5層構造の防弾ガラスや、ライフル銃でも撃ち抜けへん」

「それを撃ち抜ける銃があるとしたら？」

「そんなもんあるんか？」

「バレットM82A2対戦車ライフル、通称コブラ砲、97番世界の銃だ」

仕事が始まった。

「奴のオフィスは、18階の25号と……」

スコープを覗くと奴の姿が確認出来た。

弾丸は、Raufoss Mk 211（作：Raufoss Mk 211、焼夷弾と徹甲弾、炸裂弾の効果を併せ持つ弾丸で、劣化ウラン弾でもある）

彼はレバーを起こすと、後ろに引いて薬室に弾丸を装填した。そのままレバーを戻して元の位置に倒すと、二脚を開いて銃を固定する。

ここは本部ビルから1500m離れた一般のビルの屋上だ。

バレットM82A2対戦車ライフルの射程はおよそ2500m、弾丸の飛距離は実に12Kmに達する。

ここからなら余裕の距離だ。

風は南南西1・2mほとんど障害にならない風だった。

一方、オルネライア執務官はドアに注意を払っていた、窓側はビルの外500mにバリア、そしてはめ殺しの窓は防弾ガラス、襲ってくるなら、ドアしかないと言っていた。

ヴァイスはトリガーに指をかけ、ゆつくりと引き絞った。

瞬間、もの凄い轟音と共に爆煙と炎がマズルブレーキから吹き出す。

放たれた弾丸は、あっさりとバリアをぶち抜き、ガラスに小さな穴を開けた。

直後、オルネライア執務官は胸から上を木っ端微塵に吹き飛ばされ、彼の部屋は瞬間的に5000度の炎が支配した。

「ラグナ、敵は取ったぜ」

夜中の国道を、西に向かって走る車が1台、あの5人が乗っていた。

「八神ってのは随分辺鄙な所に住んで居るんだな」

「この距離やばくないですか？市内までぎりぎり砲撃が届かない距離ですよ」

「なかなか、考えているじゃないか」

国道から分かれる道まで来た時、道の真ん中に、甲冑姿のはやてが立っていた。

「遅かったなあ、もっと早う来るかと思ったわ」

「これはこれは、わざわざ殺される為にお出迎えご苦労」

彼のミスは、車を止めて外に出てしまった事だった。

ズドッ

瞬間、背中から剣が彼の胸まで貫通していた。

暗闇に潜んでいたシグナムにあっさりと殺されたのだ。

「殺されに來たのは、どっちやろうなあ」

残りの4人のザコ達は、もはやどうする事も出来なかった。

一人は窓から入ってきた太い腕に掴まされると、首をへし折られて絶命した。

後部座席の真ん中に座っていた一人は、ガラスの外からペンデュラムで頭を打ち抜かれた。

はやてが助手席のドアを開ける。

外に転げだした一人に、ラケーテンハンマーが振り下ろされる。

最後の一人は完全凍結されて、砕け散った。

翌朝、港で無惨に殺された4人が乗った車が引き上げられたという。

「じゃあ、拘置所まで護送をお願いします」

あの3人を、護送車に乗せてギンガがハッチを閉じた。

この護送車は、一旦ハッチを閉めると中からでは絶対に開ける事が出来ない。

掛けたバインドが解かれると、内部は密閉式のAMF空間に代わる仕組みだ。

そのため、犯人達と一緒に看守が乗る事はないのだが、それを見越していたかの様に、どこから弾丸が飛んできた。

ガンッ

金属音がした瞬間、護送車の装甲が大きくへこみ、その真ん中に穴が空いていた。

もう一度ハッチを開けると、犯人達は黒こげの焼死体になっていたという。

遅れて、遙か遠くの方から、銃声が聞こえてきた。

どおやら狙撃だった様だ。

「主、今回の様な危険な事は、なるべくおやめ下さい、我々の目の届かない所で何かあっても困ります」

「うーん、シグナムがそう言うなら、ちょっと気を付けるわぁ」

「でも、奴らはこれで本腰を入れて、仕事人を潰しに来るやろうねえ？」

これからはキツイ戦いになるよ」

「はい、望む所です」

第12話 完

ヴァイス絶叫（後書き）

次回、評議会派の刺客がレティを襲う。
しかし……

レティ襲撃（前書き）

評議会派の援軍がレティ提督を襲撃する。
しかし……

レティ襲撃

地上本部では、ビルが狙撃され、しかも死者を出した事が深刻に受け止められていた。

今まで完璧な防御などと言っていたものが、このていらくである。

弾丸は、碎け散っていて特定さえ出来ず。
部屋の中は中程度に放射能汚染されていた。

（作：R a u f o s s M k 211は通常、弾丸の芯にタングステンを使用するが、アメリカ軍仕様は劣化ウランを使用する。
あまりの破壊力と、非人道的な殺傷性、放射能汚染の問題から、イラク戦争以降ベルサイユ条約に追加登録され、現在は使用が禁止されている）

もはや、地上本部の評議会派だけでは対処が出来ず、数日後、本局から精鋭部隊200名ほどが送られてきた。

評議会派の、ばりばりの戦闘員精鋭部隊である。
いずれも、AAクラス以上、Sクラスも何人が含まれている。

「随分ぎょうさん送ってきたなあ、向こうはまだそれだけの余裕があるんやろつねえ」

「ええ、ただアレだけ一度に相手をするのは正直厳しいかと……」

「まあ、どう出るか動きを見よう」

精鋭部隊の半分は、評議会派の幹部の護衛に割かれた。
残りの半分が、仕事人捜しを始め、半分がどこかへ消えた。

「やはり実験施設は、このクラナガン周辺にあるんやろっね」

「消えた50人は、恐らく施設の警備と完成を目指して何かしているのだと思います」

「やろっねえ？まあ、そっちの方は、専門のチームに任せとこ」

「それよりも、今後は少し仕事がやりにくいよ、50人も出張って来てるよって、見つかって捕まる訳には行かんし」

変わって高町家、二週間ほど前になるだろうか？

フェイトの様子が何か変なのだ、別段取り立ててどうと言う事は無いのだが、何となく雰囲気が違う、

何だか、ヴィヴィオと接する態度と言うか、視線を微妙に外していると言うか何かがおかしいのだ。

あの晩血の臭いをさせて帰ってきた晩から変なのだ。

なのはは、血の匂いに非常に敏感だった。

人には言えない、高町家の秘密、彼女の実家にはとんでもない秘密があるのだ。

そう、彼女の家には地下室がある、それも相当な広さの地下室、死体処理施設まであったりする。

幼少時代、時々怖い人たちが来訪しては、地下室へお通しして消えて貰うことがあった。

その度に、父は、兄と姉は凄まじい血の臭いをさせていた。

嗅ぎ慣れた血の臭い、すぐに分かった。

執務官としては当然、戦闘をする事は当たり前だろう。

だが、その結果は悲惨なものだったと想像が付いた。

だからこそ、聞くに聞けない親友の事情、いつか話してくれるまで待つしかなかった。

ヴィヴィオもまた、何かしらのフェイトの変化を感じていた。

いつもと変わらぬ優しいフェイトママ、だけど、何か雰囲気が変わった様な、何となく違う感じ。

笑顔に力がないというか、心からの優しい笑いではないというか、どこか心がここに無い様な感覚、何か悲しい黒い陰を感じていた。

「ねえ、フェイトママ、何かあったの？」

「何もないよ、ヴィヴィオ」

そう言つて、笑い返した笑顔の後の一瞬、とてつもなく悲しい目をヴィヴィオは忘れないだろう。

フェイトは、未だに迷つていた、鬼になりきれない自分に、罪の意識をヴィヴィオに看破されたあの瞬間、自分の罪の重さに打ちのめされた。

これが地獄の始まりだった。

もし、修羅と化したままの自分で、何人が斬り殺していたら、恐らくはもう二度とヴィヴィオの顔を、見る事すら出来なかつただろう。

せめて、仕事と割り切れる様に配慮してくれた、はやての心遣いに感謝するしかなかった。

だが、自分は仕事人を選んでしまった。
そのことに苦悩し、傷付き、それを抱えて一生生きなければならぬ地獄、「もはや後戻りは出来ない」と言われた言葉が重くのし掛かつていた。

子供の素直さというのは、実に残酷である。

素直であるが故に、簡単に心の中を覗かれてしまう。

「何かあつたの？」と聞かれた時、「何もない」と笑顔で返したものの、その一言は酷く彼女の心を抉っていた。

夜中に一人、自分のベッドの中で涙を流して耐えるフェイトの姿

があつた。

その姿はあまりに儚げで、触ればそのまま消えてしまいそんな弱々しい幻の様な姿だった。

それでも彼女は戦うだろう、いつかこの地獄から抜け出せる日が来ると信じて……

こちらは、本部ビル内、評議会派の幹部達が集まっていた。

「これは由々しき事態だ、なんとかせんと我々の命が危ない」

「それに、例の実験施設もまだ完成には至らず、完全な数値すら手に入っていない」

「オツペンハイマー」クレイテンが死んだのは痛かったな、奴の助手達もあまり役に立ちそうにはないし」

「ここには100人の護衛が居るから簡単には襲つて来ないだろうが、早く仕事人を始末せんとこちらが何時殺されるか分からん」

そんな会話を覗いている人物が、正確には指があつた。

戦闘機人のISは完全なAMF空間の中でも発動が可能だ。

それ故、ヴェロッサに代わってセインが一部始終を覗いていたのだ。これからは、彼女が局を覗くスパイとなったのだ。

「仕事人を始末するより先に、邪魔な奴が居るだろう？」

「と言うと、改革派の急先鋒レティ提督ですか？」

「そうだ、奴さえ始末すれば、改革派は大きく崩れる」

「奴が居なければ、もう一度主導権を取り戻す事は可能だ」

「でも、奴には得体の知れないボディーガードが5人もいますぜ」

「魔力ゼロの奴に何が出来る、今居る護衛から10人募って、明日の帰宅時を狙えばよい」

「大変だ」

セインは、慌てて局を後にした。

「たったの10人？随分安く見られた物ねえ、100人来ても大丈夫な様に護衛を雇ったというのに」

その言葉にセインが啞然とする。

「この5人は魔力こそゼロだけど、戦闘能力はSSSを圧倒的に凌駕します、まあ一人二人捕まえて何か吐かせましょうか？」

（何を言って居るんだろう？この人は？）

セインはそう思った。

魔力ゼロでSSS 何てあり得ない、とても信じられない事だ。

「ちょっと試してみる？誰と戦ってもあなたじゃあ勝てないわよ」

セインが選んだのは、やはり塩谷氏だった。

見た目一番弱そうに見えるからだ、でもそれは見せかけでしかなかった。

先に仕掛けるセイン、しかし交錯した瞬間、塩谷氏は姿を消した。

「若いおなごの尻はええのう」

彼女におしりにスリスリする塩谷氏、

「この糞じじい」

殴ろうとしたがもう居なかった。

「この控えめな胸もなかなかじゃて」

今度は前から胸を揉まれていた。

「ヤメロこの野郎！」

蹴りを入れるが当たらない。

「これならどうだ！」

ISを発動し、地面に潜るサイン、足下から狙ったつもりだが、それさえ読まれていた。

足を掴みに言った手を、逆に掴まれ引き上げられた。

掴んだ所から、簡単に関節を固められていた。

もうこれではどうしようもなく、降参するしかなかった。

「明日の夕方ですね、楽しみにしています」

レティ委提督の不敵な笑いに、かなり恐ろしいものを感じたセインだった。

翌日夕方、レティ提督は、自分の屋敷へリムジンで移動していた。突然魔力弾が飛んでくるが、それを読んでいたかの様にかわす。

後ろの方で、一般車両が巻き込まれて爆発する。

路肩に停車すると、回りを10人の魔導師に取り囲まれた。

リムジンから降りてきたのは、二人のボディガードだった。

「佐藤さん、マイケル、二人ぐらいは生かして捕らえなさい、後は好きにして結構です」

「佐藤、提督のお願いはお前に任せた、俺は6人引き受ける」

そう言うとマイケルは、銃を抜いた。

パ~~~~ン

1発の銃声がした時、6人が頭をぶち抜かれて死んでいた。
マイケル・モーガン 50才、元シークレットサービス、全米に6人いると言われるSix on oneの使い手である。

「さて、俺の相手はどいつかな？」

佐藤氏が、4人の前に立ちはだかる。

佐藤氏の日本刀は、通常より一尺長い、かなりの間合いを持つ居合
い刀である。

刀の鰐に親指が掛かっている。

「さあ、誰でも良いぜ、掛かってきな」

相手は舐められていると思ったのだろう、剣のデバイスを持った
男が対峙した。

「お前も抜け、そのままならそれでも良いが斬って捨てるぞ」

そう言つて、佐藤氏の間合いに入ってきた。

距離的には、まだ届かないと思つたのだろう、しかし、居合いの間
合いは見た目以上に広い、槍の間合いに匹敵するほどだ。

居合いの間合いに入ったのは不味かった、彼が斬りかかろうとした
瞬間、佐藤氏が視界から消えた。

次の瞬間、佐藤氏は彼の後ろにいた、それだけでなく刀を構えて他
の3人と対峙していた。

剣のデバイスの男は、振り向いて佐藤氏に斬りかかろうとしたが、
その瞬間、デバイスが二つに分離し、自分の体も二つになっていた。

神速の居合いがなせる、技であつた。

宮ノ内流と薩摩流の違い、同じ示現流でも初太刀が違う、宮ノ内流は居合いから入る事が多いのだ。

3人は何が起きたのか分からなかった、気が付いた時には仲間が一人、真つ二つになっていた。

そして、見た事のない構えで、刀を構えているのだ。

もし逃げようとして背中を見せれば、その場で即斬り殺される、かといって、戦つたとしても勝てる見込みはゼロに等しかった。

選択としては投降するか、全員で攻撃するか、誰か一人を犠牲にして逃げるくらいなものだった。

だが、投降すれば、恐らくこの襲撃計画がばれて、自分たちも仲間に殺されるだろう。

結局選択したのは全員攻撃だったが、勝てるはずもなかった。

杖を構えた瞬間、佐藤氏は3人の真ん中に飛び込んでいた。

刀を返すと3人を一瞬で峰打ちにした。

佐藤氏 45才 宮ノ内示現流8段 師範 神速の太刀は、御神流に匹敵する。

リムジンは3人を収容すると、7人の死体を残して走り去つたという。

第
1
3
話
完

レティ襲撃（後書き）

レティ提督が、評議会派の所に乗り込む。
そして大変な事に。

レティ乗り込む（前書き）

レティ提督とボディーガード二人が、評議会派の所に乗り込みます。
そして大暴れ……大変な事になります。

レティ乗り込む

ブラケット・ピエモンテかなり優秀な魔導師だ。

だが、彼は健康上の理由から、管理局に採用される事はなかった。彼は、心臓に大きな欠陥を抱えていたのだ。

彼は3ヶ月ほど前、心臓移植の手術を受けた。

「よくこんな状態の心臓で、今まで生きてこられたもんだ」

医者がそう感心するほど、彼の状態は悪化していた。だが、彼は後にこの手術を受けた事を後悔する事になる。

それに気付いたのは、手術から2週間目の事だった。

自分の中に、自分以外の誰か分らないもう一人が居るのだ。気持ち悪い、何かどす黒い感情が自分の心を黒く染めようと狙っている感じだ。

手術から1ヶ月目、丁度退院の日だった、そいつはブラケットに話しかけてきた。

「よう、相棒、元気か？つて言うか俺が元気ならお前も元気だよな、俺はお前の中に居るんだから」

初めはそんな感じだった。

「お前魔導師なんだってなあ、俺も魔導師だったんだぜ、おまけに医者だった」

そう、彼の名はクロフォード、だいぶ前にシャマルに殺され、移植用臓器にされたあのクロフォードであった。

心臓には、ごく稀に元の持ち主の性格や記憶が宿る事があるという。その仕組みとして、心臓には脳細胞と同じ数だけの神経細胞が存在している事がある。

本来なら、数千個有れば充分な数の神経細胞であるにもかかわらず、筋肉細胞よりも数が多い神経細胞が、何故心臓に存在するのか？有る医学書では、こう説明をしている。

人間の体は、パソコンに例える事が出来、脳みそを、ハードディスクとCPU、メインメモリに例える事が出来るという。そして心臓の神経細胞は、RAMメモリなのだという。そしてごく稀に、RAMメモリに情報が残ってしまう事があり、それを移植された場合、コンピュータウイルスに感染する様に、前の人間の情報が、感染するらしい。

「どうだ、お前医者になりたくはないか？そうすれば今みたいに生活保護で生きなくても、ずっと良い暮らしが出来るぞ」

その言葉に、耳を貸してしまった事が、彼の最大のミスだった。気が付いた時には、彼に体を乗っ取られていたのだ。

「シャマル、必ず殺す」

どす黒いオーラが、彼の体を包んでいた。

だが、彼が戦える様になるには、まだしばらくの時間を必要とした。

体が弱すぎたのだ、魔力値、魔力量は申し分ない、ただ、長い闘病生活が彼の体を相当に弱らせていた。

今はまだ、その時ではないと悟ったのだろうか？彼はただ、体力の回復を図ってその時に備えるしかなかった。

一方こちらはレティ邸、拉致されたあの3人の取り調べが続いていた。

「あの50人はどこへ消えた？どこで何をやっている？」

尋問される事が、「何故どうして自分を襲った？」ではなく、全く関係のない事なのか？三人にはさっぱり理解出来なかった。とうとうその内の一人が、口を開いた。

「何故襲ったのか？とは何故聞かない？」

「あら、その必要がないからよ」

そう答えたのはレティ提督だった。

「これを見なさい」

モニターには、悪だくみの一部始終が映し出されていた。

「か、隠しカメラ？」

「その通り、これが明日には本部ビル内だけでなくクラナガン市内全てで流れるのよ、どうなるのかしらねえ？」

あなたは解放されたとしても、仲間に殺されるか？仕事人に殺されるか？二つに一つよ、好きな方を選びなさい。

もう一つの選択肢として、あの50人がどこへ行ったか喋れば、このまま保護してあげますが」

三人は、ぞっとした、このまま拘束されて生き続けるか、殺されるかを聞かれていたのだ。

「す、少し考えさせてくれ」

いい手を考えつくまで、粘る作戦に出た。

「別に良いけど、あの映像が流れたらあなたは市内へ強制的に放り出されるわよ、

後1時間だけなら待ってあげても良いわよ」

「こ、この女狐め」

それから1時間が経過する。

彼らは話し合った、しかし、明確な答えは出るでもなく、1時間が経過してしまった。

「さて、1時間経ったし、時間切れね、もう喋る必要はないわ、死刑決定よ」

「待て、1時間待つと言ったじゃないか？」

「1時間以内に喋れって言ったのよ、別に喋る必要はもう無いから、

アコース査察官お願いします」

ヴェロツサが、彼らの頭の中に手を突っ込んだ。

「こちらの二人はス力ですね、何も知らされていません。

なるほど、北ですか？ヴェルカ領近くの森林地帯……ああ、あそこが入り口ですか？

提督、欲しい情報はあらかた手に入りました」

「解りました、ではこの人達には、明日少しだけ役に立って貰いましょう」

翌日、地上本部ビル内

レティ提督の到着する少し前だった、何人かの局員によって、放送室がジャックされていた。
中心にいたのは、はやてだった。

「フェイトちゃん、そっちはどうや？」

「TV局もOKよ」

「じゃあ、流すで」

丁度その頃、レティは玄関に到着し、二人の護衛と縛り上げた3人を連れてビル内へ入っていった。

評議会派の重役や護衛達は、昨夜10人が襲撃に失敗した事をどうしようか話していた。

そこへ、レティ提督に乗り込まれたのである。

証人の3人を突き出され、その上突然始まった放送は、昨日の悪だくみだった。

「ああ、この放送、市内にも流れてますから」

「何いゝ？」

遅れて、本日の会議内容からついさっきまで、全て流れてしまった。

市民も驚いた事だろう、朝の報道番組がいきなりの大スクープである。

そしてここからはリアルタイム、

「あなた達、殺人未遂及び殺人幫助で全員逮捕します」

「かまわん、殺してしまえ」

レティ達3人に襲いかかる、およそ100人、だがAMFの中では大した力が出せない。

対して今回の護衛は、また強い。

一人は、陳 劉邦 37才、太極拳 9段 師範、棍術7段、元、

中国武装警察特別警備隊長

もう一人はチャチャイ・プン・ソン・チャック・ソイシレイ（長いのでチャチャイ）30才

ムエタイの悪魔と呼ばれた男、身長203cm 体重130kg
大きくなりすぎて戦う相手が居なくなつた男。

その後アメリカに渡り、シークレットサービスになる。この巨体で信じられないほど速い。

襲いかかった者共が次々と、広い大会議室の壁や天井まで飛ばされて突き刺さっていく。

物の5分だった、あっという間に100人近くいた護衛達は全滅していた。

ついでに言うなら、ほとんどの幹部達もぶっ飛ばされてKOだった。

残ったのは、バルバレスコ監察官ただ一人だ。

「さあ、覚悟なさい」

最後の一人に、強烈なアップercutが入ってKOとなり、逮捕された。

「以上、現場からサインがお伝えしました」

の一言で、放送は終了した。

市内は騒然とした、地上本部内でクーデターまがいの逮捕劇があったのだ。

しかも、上級幹部を頂点に、かなりの悪だくみをしていた、しかも市民の味方である仕事人まで消そうとはどういう事か？

市内に出ていた50人に次々と空き缶やら、石やらが投げ付けられる。

ここで市民を殺せば、今度は自分たちが仕事人に殺される、手を出

したら負けなのだ。

50人は、もはや市内から撤退するしかなかった。

でも本部には戻れない、向かった先は、例の研究施設だった。

その後を付けられているとも知らずに、彼らはそこへ撤退していた。

一方、教導隊

「なーんか、私たちだけカヤの外だね、ヴィータちゃん」

煎餅を食べ、お茶を啜りながらTVの中継を見ていたのはだった。

レティ乗り込む（後書き）

次回、殺されたはずのクロフォードが復活、シャマルに復讐をしようとします。

復讐のクロフォード（前書き）

随分前にシャルマルが始末したはずの極悪医師クロフォード、しかし彼は、心臓だけになっても生きていた。シャルマルに復讐するために。

復讐のクロフォード

あの逮捕劇から一ヶ月、世の中は驚くほど平和だった。地上本部からは、評議会派は一掃された。

それに呼応してだろうか？管理世界の2番と3番でも地上本部内でクーデターが発生し、評議会派が一掃されていた。管理世界の1〜5番は、それぞれに地上本部がある。その内の三つは、既に評議会派を駆逐して平和を手にしていたのである。

後は、4番、5番、本局である。

だが、ミッドチルダには、まだ消えた1000人の増援部隊と、実験施設が残っているのだ。

レティ提督の究極の目標は、評議会派の完全駆逐である。もうすぐ、それも叶いそうなのだが、いかんせん人手不足で思う様に事は進まない。これが管理局の悲しい所でもある。

フェイトもまた大変だった。

大量逮捕者の取り調べが思う様に進まない、結構口の堅いのが多く、毎日早朝から深夜まで捜査が続いている。

「よく体力持つよね」

と、なのはが感心していた。

別に一人で仕事をしている訳じゃあない、5人の執務官と10人の捜査官が入っているのだが、それでも仕事は山の様に積もっていくのだ。

はやても、同じチームで仕事をしていた。

やはり、山の様な書類に埋もれながら、逮捕者の尋問をする日々が続いていた。

因みに、本部内のデバイスの持ち込みは解禁され、AMFも解除された。

そんな中だった。

この数日、市内で奇妙な殺人事件が発生し始めた。

歩いていた人が突然倒れて、死亡する。

しかも奇妙な事に、死んだ人は共通して内蔵を抜き取られていたのだ。

正確に言えば、移植に使える臓器ばかり抜かれているのだ。

シャマルはすぐに気が付いた、また自分の教え子の誰かであると

……

まだ、仕事の依頼は来ていないが、これ以上の被害者を出さない為、仕事の合間を見ては捜査を開始した。

だが、簡単に手掛かりが掴めるはずもなく、時間だけが過ぎていく。

今度は、白昼堂々繁華街のど真ん中で事件が起きた。

流石に、これは見過ごす事が出来ず、はやてが事件を担当する事に

なった。

「シャル、今回は全く目星が付かんの？」

「何人かはピックアップしてみたけど、裏が取れるアリバイが成立するの、全くの白よ」

「参ったなー、シャルの勘だけが頼りや言うのに」

「司法解剖からは何か解らなんだか？」

「こう、盗られた臓器やのうて、抜き取り方の特徴とか、抜き取る腕とか」

「一人だけ、該当者が居るわ、正確には居たと言った方が良いかしら」

「どう言う事や？」

「以前の仕事で殺した、クロフォードという男が、今回のやり方と非常に良く似た摘出を行うの、その、摘出の癖までそっくりで……」

「死んでしまった奴が犯人とは、思えんけどなあ？ま、現場周辺の防犯カメラから当たってみようか？」

防犯カメラの映像を解析していく、最初に気付いたのはシャルだった。

確かに彼の、クロフォードの車だった。

黒い高級なワゴンが、一旦通り過ぎ、近くの路地に停車していた。だが、人が降りてくる様子はなかった。

そして、被害者が倒れるとその車は、走り去っていた。

「そんな、何故彼の車が……」

「まさか仕留めそこねてへんよねえ？」

「それはないわ、彼は脊髄を切断して動けなくなった所を、生きたまま順番に内臓を摘出していったのよ、最後は心臓だったけど……」

一同啞然とした。

「シャマル、それ怖すぎや……」

捜査は、クロフォードの自宅を監視する事から始まった。出てきたのは、ブラケット・ピエモンテと言う男だった。彼は、近くのビルに消えていく、ここで闇医者をしていたのだ。

今度は、ブラケット・ピエモンテの素性を洗い出す。あのクロフォードの心臓を移植された男だった。そんな中、ついに依頼が来た。

ビリケンさんの前に、殺された誰かの遺族だろうか？お金を備えて頼んでいった。

「殺しの的は、ブラケット・ピエモンテただ一人、仕事人はシャル、サポートはザフィーラや、一筋縄では行かない危険な奴や、確実に殺して二度と生き返ってこられんようにしてやりい」

仕事が始まった。

あの雑居ビルに忍び込むシャル、しかしそこは、彼のテリトリ―だった。

シャルは忍び込んだ時点で、彼に補足されていたのだ。入り口のドアがいきなり閉まり、施錠されてしまう。

どこから見ているのだろうか？こちらに向かって話しかけてくる。

「ご機嫌ようシャル先生、お久しぶりですねえ」

「どこ？あなたは誰？」

「イヤだなあ、忘れたんですか？あなたに殺されたクロフォードですよ」

「クロフォードってまさか、あなたは死んだはずよ」

「生きていたんですよ、心臓だけになってね？」

今度はあなたに、心臓だけになって貰いましょうか？」

(うつ、この感覚は……)

その場を飛び退くと、体に取り憑いたリンクを断ち切る。

(危なかったわ、心臓を抜かれる所だった)

攻撃は壁の向こうからだった。

一方ザフィーラは、ビルの中に入れないで居た。
ビル自体が結界になっていたのだ。

魔法戦になれば、攻撃力の乏しいシャマルは勝てる見込みがほとんど無い。

この千年ずっとパートナーを組んで来た仲だからこそよく分かる。
こういう時は、自分が居なければシャマルがやられてしまう。

だが、殴ろうが蹴ろうが結界はびくともしない。
念話さえ通らない。

いつその事ビルごと破壊すれば、結界は壊れるかも知れないが、
仲の人々がどうなるか解らない。

その時、マンホールの蓋が目に入った。

一方、ビルの中ではシャマルが追いつめられていた。

壁の向こうから、旅の鏡で内蔵を狙ってくるのだ。

大した攻撃魔法を持っていないシャマルにとって、逃げるだけが精一杯だった。

だが、彼女とて逃げているだけではなかった。
身を翻す度、指から金色の糸が少しずつ紡ぎ出されていた。
糸は、ゆっくりと床を這い、倒すべき相手を探していたのだ。

流石に相手の結界の中である。

派手な動きは、相手に簡単に察知されてしまう。
そして何よりも幸いしたのは、ペンデュラムがもの凄く小さかった
事だろう。

シャルは考えていた、何故直接襲って来ないのか？
相手の攻撃をかわしながら、考えた末の結論は、相手がペンデュラ
ムを警戒している事、
そして、こちらの攻撃をかわしきる体力がないという事だった。

とにかく遮蔽物を多くして、簡単には内蔵を狙わせない。
今は、こちらから旅の鏡は使えないし、なんの攻撃も出来ない。
戦況は絶望的だった。

だが、とうとう隣の部屋への入り口を見つけた。
ペンデュラムは、もそもそドアの下の隙間をくぐった。
彼を見つけると、そっと彼の後ろに這っていく、その直後だった。

とうとうシャルが、捕まった。

「さあ、これで終わりにしてあげます」

「終わるのはあなたの方よ」

次の瞬間、彼は雁字搦めに縛り上げられていた。

シャルは、一瞬速くペンデュラムを発動させていた。

それまで、動くのに必要な、ごく僅かの魔力以外注いでいなかったペンデュラムに、一気に魔力を注いだのだった。

ドアを開けて、シャルが入ってくる。

「さあ覚悟なさい」

いつの間にか、ペンデュラムの片方が彼女の手元に戻っていた。

ビスッ！

ペンデュラムが、彼の頭を打ち抜いていた。

更にもう一発、心臓を打ち抜く、これで完全に死んだと確信した。

全てが終わった時、ザフィーラが地下室から上がってきた。

下水管をぶち抜いて地下室から侵入してきたらしい。

シャルの無事を確認すると、何も言わずに帰っていった。

これで本当にクロフォードは死んだのだろうか？

それは誰にも判らない、もしかしたら彼の臓器を移植された他の人間が、第3第4のクロフォードとして甦るかも知れない。

彼は、一体何の為に甦ってきたのか？今となっては誰にも判らない。

第15話
完

復讐のクロフォード（後書き）

次回、いきなりの最終決戦

いきなり最終決戦！（前書き）

あれから一ヶ月ちょっと、随分平和になってきたと思ったら、評議会派が戦艦まで持ち出して、攻撃を仕掛けてきた。いきなり最終決戦が始まる。

いきなり最終決戦！

あの、逮捕劇から一月半、世の中は信じられないくらい平和だった。

どうやら、評議会派の人間達と犯罪者が如何に癒着していたのかがよく分かる。

捜査も一段落の見通しが付き始めた頃、レティ提督が実験施設への総攻撃作戦を立てていた。

今回は、地上本部全ての力を結集して全てを終わらせると息巻いている。

だが、事はそんなに簡単に進むはずがなかった。

先に動いたのは、評議会派だったのだ。

クラナガンから北に約100km、ヴェルカ国境との中間点付近に広がる森林地帯、嘗てスカリエッティのアジトがあった付近、突然、山の斜面が爆発し、そこから放たれた砲撃は本部ビル近くの海上に着弾した。

斜面にぼつかりと穴が空き、中から出てきたのはL級戦艦だった。

「上空の次元航行隊と地上本部に次ぐ、少しでも抵抗すればクラナガンを砲撃する！」

いきなりのことだった。

クラナガン市民全てを人質に、仕掛けてきたのだ。
こうなつては、最強の戦艦も手も足も出せなかった。
上空に待機している事しかできない、地上本部にしても、まさかこんな手で来ようとは思っても見なかったのだろう。

「ご機嫌ようレティ提督、早速だが、あなた方には退陣して頂く、要求が受け入れられない場合は、クラナガンは火の海だ」

「あら、出来ない相談ねえ、それにそんな事をすれば、あなた方のお仲間は道連れよ、普通は人質の解放からじゃなくて？」

「うっ、卑怯な……」

「どっちが卑怯なのかしら、まあ人質の変換に関しては応じる用意なら有るけれど……少し待って頂けるかしら？」

そう言つて一方的にモニターを切つたのは、レティ提督だった。
すぐに、精鋭達が集められる、ちび狸と女狐がタッグを組むと、とてつもなく恐ろしいと言う事を、評議会派の連中は知らなかった。

一方なのはは、ヴィヴィオの事が心配だった。
今日が平日で本当に良かったと思ったのは、カリムからの連絡があったからだ。

ST・ヒルデ魔法学院の生徒達は全員、協会本部が保護して既に、協会本部のシエルターに避難済みだった。

これで心おきなく戦える。

すぐに、レティ提督から指示が出る、作戦開始だった。

「お待たせしましたバートンスパーク提督、これより人質の一部を解放します、護送車でそちらに送り届けますので、それまでは砲撃は待つて貰いたい、これはリアルタイムの映像です」

そこには、バルバレスコ監察官を初めとする地上本部の重役達が護送車3台に乘せられる姿が映し出されていた。

「確認した、では、こちらに到着するまで待たせて貰おう」

「そちらに到着するまで、おかしな真似はしないで下さいね、護送車には爆薬も積んでありますから、万が一の場合は爆破しますので」

本部ビルを、護送車が3台出て行く、北に向かって……

「今の内に市民を避難させて下さい」

108部隊や、航空防衛隊などの隊員が、市民の避難誘導を行っていた。

「今の内に、地下に避難して下さい」

市民達は、2年前のJS事件を思い出して不安を隠せないで居た。

ただ、あの事件の教訓もあったのだろう、避難は驚くほどにスムーズだった。

護送で稼げる時間はせいぜい2時間が限度、その間にどれだけの事が出来るのだろうか？

それは虚しい足掻きになるのではないだろうか？
局員達の間には動揺が広がっていた。

「本部ビルの中の皆さんにお知らせします、もうすぐ転送機付近から白兵戦が始まります、手の空いている者は白兵戦の準備をお願いします」

レティ提督の声だった。

2時間後、護送車がL級戦艦のすぐ前に到着した。
護送車の後ろのハッチが開いた瞬間だった。

「強大な魔力反応が発生しました、その数3、魔力値どんどん上昇しています」

護送車に乗っていたのは、人質などではなかった。

乗っていたのは、アギトを融合したシグナム、リインを融合したはやて、そしてフェイトだった。

ここまで近づく為に、護送車のAMFを利用していたのだ。

彼女たちは飛び立つと、L級戦艦の前に立ちはだかつて攻撃を始めた。

「駆けよ隼！」

放たれたシュトルムファルケンの一撃は、戦艦の砲身の中に消えて、大爆発した。

戦艦は左側の船首から3分の一ほどが折れて千切れ、大破した。

「打ち抜け雷神！」

巨大な金色の剣が、戦艦の右船首を切り落としていた。

「来よ、白銀の風、天より注ぐ矢羽根となれ、フリースヴェルグ！詠唱完了や、二人とも待避してや、今回は全力全開でぶっ放すよ！」

シグナムとフェイトが待避する。

一方戦艦では、

「魔力値、測定不能！もはや逃げる事も、攻撃する事も出来ません！降伏しましょう！」

「出来るか！何て卑怯な奴らだ！」

そのやり取りが終わった頃には、二人の待避が完了していた。

「1発目行くよ！」

まさに1発だった。

放たれた光弾は、大地を揺るがす轟音と共に白銀の輝きを放って大爆発した。

それはまさに、核兵器と言つべき破壊力だ、周辺の森林を消し飛ばし、巨大なキノコ雲を発生させていた。

戦艦は飴の様にねじ曲がり、山の斜面に叩き付けられた。

暫くスパークすると、ドンツという大音響と共に木っ端微塵に爆発して消えた。

後には、僅かばかりの残骸が残されたという。

「困ったなあ、シグナム、この魔法6発撃つまで終われんのや、どうしよう?」

「主、何故そんな魔法を選択したのですか?」

「イヤ、あんなに簡単に落とせるとは思ってなかったし、この前はリミッター付きだったから、ここまで威力が有るとは思はなんだし」

困ったと言われても、それは困るだろう。

爆発寸前の核兵器をまだ5発も持っている様な物なのだから。

その時だった、戦艦の出てきた穴から、信じられない数の魔導師達が飛び出してくる。

本局だけではない、4番、5番世界からも増援に来ている様だ。もの凄い数の直射砲が飛んでくる。

シグナムとフェイトがこれを迎え撃つが、いかんせん数が多い。数万はいるだろうか?

はやては、向かってくる大群に向けて2発目。3発目を発射した。大群の半数は、爆発に飲まれて消滅した。

まさに消滅としか言いようのない消え方、生きている方がおかしい

と言った方が良さだろう。

はやての魔法はそれほどまでに容赦のない破壊力なのだ。

4発目は、戦艦や大群の出てきた穴に撃ち込まれた。

彼らは、実験施設の完成を諦め、巨大な転送機を作っていたのだ。

巨大転送機内で大爆発が起きる。

その爆発は、1発で山を消し飛ばし、そこに巨大なクレーターを作っていた。

これで転送機は使えない、加えてまだ穴の中にいた部隊は全滅していた。

残りのザコ共約1万、はやては情け容赦なく残りの2発をぶっ放した。

残りの魔導師達、約2000〜3000ほど、だが、はやての方が限界だった。

「ごめんシグナム、魔力が足らん、ここ迄や、後は任せたで」

その時だった、残りの護送車から何人かが出てくる。

内の一人は、なのはだった。

「はい、これシャル先生とマリーさんから」

「何これ？この元氣ドリンクの瓶みたいな物は？」

『液化濃縮魔力素・マナギンZ』

どおやら回復アイテムらしい。

早速飲んでみる。

「うえー、不味いなあ、せめてイチゴ味にして欲しいなあ」

味とは裏腹に、もの凄い効き目だった。

はやての魔力は30%程回復していた。

これなら、いくらかの魔法を放つ事が出来る。

だが、彼女に求められたのは、全体の指揮を執る事だった。

残りの魔導師の相手は、なのはとフェイト、シグナムがやっている。

もう手を出す事はほとんど無い、特に、美味しい所を持って行かれたのはが燃えている。

情け容赦のないデイベインバスターの掃射が始まっていた。

一発で数百人ずつの魔導師がたたき落とされていく、彼らにとってこれは地獄以外の何者でもないだろう。

退路を断たれ、増援もなく、目の前には3大魔王+魔剣士、特にその中の一人は絶対にケンカを売ってはならない最終兵器だ。もはや玉砕だけが、彼らに残された道だった。

なのは達が戦っていた頃、地上では、ヴィータを筆頭に、ティアナ、スバル、ナンバーズ達が施設入り口に突入する所だった。

そう、結局護送車には人質など乗っていなかったのである。

ここまで、魔力反応を隠す為に護送車を使っただけなのだ。

では何時入れ替わったのか？

実は、本部ビルを出る時に入れ替わっていたのだ。

護送車は、実は6台準備されていたのだ、最初の3台に人質を乗せる所を見せて安心させ、走り出した所で入れ替わっていたのだ。本物は、まだビルの中にいた。

そして、本部ビルでは、ごく僅かに出てきた評議会派の魔導師を、あつという間に殲滅していた。

途中で増援ごと敵のアジトが破壊された為、本部ビルへの転送は僅か数十名程度になってしまったのだ。

それから約1時間後、敵勢力のほとんどを殲滅し、地上は勝利を収めようとしていた。

だが、施設内に立てこもる研究者達、簡単には逮捕させてくれない様だ。

「糞、こうなったら奴らを道連れに自爆してやる」

自爆スイッチに手を掛ける研究員、しかし、いくらスイッチを押しても何も起こらなかった。

それもその筈である、それはヴェロッサ・アコースとスクライアー族の仕業だった。

ロッサは、入り口を見つけると、何人かのスクライアー族を潜入させていたのだ。

スクライアー族は、それぞれ変身制御の魔法を持っている。

しかも、いずれも小動物に変身出来る魔法を。

小動物に化けた彼らは、こっそりとあちこちの配線を切断してい

ただ。

まあ、早い話が、ネズミなどに化けて、危険そうな配線をことごとく嚙って回ったのだ。

結局、研究員や警備に当たっていた魔導師は全員逮捕され、地上や上空にいた戦闘員は全て殲滅された。
クラナガンへの被害を全く出さず、戦闘は終結したのであった。

乗ってきた護送車が役に立った、逮捕者を無理矢理詰め込んで、
帰投する。

「悪いけど飛べる人は飛んで帰ってね、残りは歩きね」

「はい、これシグナムさんとフェイトちゃんにも」

液化濃縮魔力素・マナギンZを渡された。

「うえ~~~~、不味い~~~~」

なのはも一緒になって飲んだまでは良かったが、余りの不味さに顔をしかめる。

「それもしかしてシャマルの味付けやる？」

はやてに突っ込まれて、はっと気が付いた。

「味付けは、マリーさんがすべきだね」

こうしてミッドチルダの最も長い1日は、終わった。

第17話につづく

いきなり最終決戦！（後書き）

最終決戦に勝利し、ようやく平和を取り戻したミッドチルダ。
レティは、仕事人組織の解散を決意する。

仕事人解散（前書き）

評議会派の驚異もなくなり、平和を取り戻したミッドチルダ、
レティは、執務官、捜査官の権限強化を図り、
仕事人組織を解散する事を決意した。

仕事人解散

夕方だった、多くの局員達が現場の後片付けに追われていた。

「一体どうやってたら、L級戦艦をこんな風に破壊出来るのかね？」

「それよりもあの山を見るよ、山って言うかクレーターだけだな」

まだ煙を上げるクレーターがそこにあった。

二つ並んでそびえ立っていた山は、片方がクレーターになり、もう片方はそれまでとはまるで違う形になってしまっている。

「これがSS級ランク魔導師の力ねえ、俺たちBクラスには一生掛かっても追いつけない世界だな」

「いや、これはどう見てもSSSを超えてるって」

局員達の会話の通り、はやての力は普通じゃあない、誰が付けたか「管理局の最終兵器彼女」は伊達じゃあなかった。

同じ頃、主力戦闘員を失った本局、4番、5番世界でもクーデターが発生し、本局はクロノ提督率いる次元航行隊が、評議会派の幹部を拘束、4番、5番世界へは2番、3番世界からの増援が、それぞれ地上本部を制圧していた。

これで、レティ提督の悲願だった、評議会派の排除はほぼ成ったのである。

まあ、全ての管理世界から評議会派の人間を排除する事は不可能であろうが、大幅に力を削ぐ事には成功した。

これで向こう10年、大きな事件は起きないだろうと誰もがそう思

うほどに管理局内部の浄化が進んだ事件だった。

一方、なのは達は、後片付けの局員達を載せてきたヘリコプターで帰る事になった。

「余分に歩くのはイヤ」

と言っていた、ティアナにとってはラッキーだった。

地上本部に凱旋すると、彼女たちは英雄だった。
このクラナガンを犯罪者達の手から守り抜いた、英雄として迎えられたのだった。

だが、この後が大変だった。

事件の後は捜査が待っている、今回の事件は規模が大きすぎて、今までの体勢では捜査が進まない。

各世界ごとに10人の執務官、15人の捜査官を入れて捜査の指揮をレティ提督が執るという体勢となった。

これで、捜査が終了すれば、事件はほぼ解決するだろう。

数日後、クラナガン市内の某居酒屋にて、

「皆さん、仕事人としての活躍本当にご苦労さまでした。
仕事人は、本日をもって解散したいと思います」

「総元締め、何故今になって解散を？」

はやてがそう尋ねる。

「もうこれ以上は、仕事人として活躍する場が無くなるからです。
今までの様に犯罪者を野放しにする事の無いよう、新しい法律がも
うすぐ成立します」

「今までとどう違うのですか？」

「執務官、捜査官に隠密行動の権限と、その場で即時逮捕権を執行
できるように法律を強化しました。
つまり、相手が誰だろうとその場ですぐに逮捕できるようにしまし
た。

もっと簡単に言うなら、踏み込まれたり逮捕されたりした方が悪い
という風に法律を改正したのです」

「つまり、自由に捜査出来て、自由に踏み込めて、自由に逮捕出来
る言う事ですか？」

「そうなります」

「でも、世の中には病むに病まない事情で訴える事すら出来ない
人たちもたくさん居ると思います。

そう言う人たちの事を考えると仕事人も必要ではないか？思っんで
すが……」

「だからこそその隠密行動なのです。それに、これ以上あなた達に闇に染まって欲しくはないのです」

はやては、はつとした、既に自分の中に「悪人」仕事 殺す」と言う図式が出来上がっていたのだ。

闇に染まる自分、そして部下達、もしかしたら取り返しの付かない事になるかも知れない所だった。

「でも、もし巧妙に逮捕を逃れようとする犯罪者が居た場合、仕事は個人の裁量に任せます。私はこれ以上干渉はしません」

これを持って、仕事人は組織を解散した。

レティ提督は、今まで以上に忙しい日々を送る事になっていく、そして、はやて達もまた忙しい日々には忙殺されていく事になるだろう。

「……言う訳や、もう殺さんでもええよ、フェイトちゃん」

フェイトの目から大粒の涙が溢れていた。

今までの仕事は、苦い思い出として残るだろう。

でも、これからはそれを教訓に、執務官としてやっていけるだろう。これで、フェイトは何か吹っ切れた様だった、自宅に戻っても、ヴィヴィオを見る目が以前の優しいフェイトに戻っていた。

もう、彼女は闇に落ちる事はないだろう、自分の闇と向き合える強い心と暖かい仲間がいるのだから……

「……と言う訳や、みんな、これからは極力逮捕や、でも、どうしても許せへん悪い奴だけは始末する方向で行こうと思う」

「つまり、仕事人はやめるのではなく、たまには仕事をするという方向になるのですね？」

「シグナムの言う通りや、今後は年に1回あるかないかの仕事になると思うけど、これからよろしく頼むわあ」

その時だった、シグナムを筆頭にヴォルケンリッター6名がはやての前に跪いた。

「主、我らヴォルケンリッター6名、何時、如何なる時も主に従い、主を守り、どこまでも供すると改めて誓います。

例えそれが、如何なる地獄であろうとも」

はやてが、大粒の涙をこぼしながらみんなに抱き付いた。

「ありがとう、ありがとうな、みんな」

彼らの絆は、血の繋がった家族よりも固い。

それから、約半年後……

「おい、聞いたか？久しぶりに出たんだってよ、仕事人」

「あいつら、まだやってたんだ？」

「今度は、悪徳政治家がやられたらしい」

「やっぱり仕事人は、ひと味違うねえ」

そんなサラリーマン達の噂話を聞き流しながら、はやてが出勤していく、仕事人は今もなお健在だった。

必殺仕事人 in ヴォルケンリッター 完

仕事人解散（後書き）

読んで頂いた皆様には、大変ありがたく、また申し訳なく思っています。

もっと楽しんで読んでいただけるように、もっと面白く、且つ話数をもっと多くしなければならなかったのですが、展開を早くしすぎて、思う様に話数を増やせませんでした。

後から読み返してみても、なのはVSフェイト再びみたいなエピソードを書き忘れていたり、もっとバトルを多めにしなければいけないと感じたり、表現のつたなさ、誤字脱字の多さなど、直さなければ行けない事の多さに自分でも驚きました。

まだ小説に挑戦して3本目の作品です、出来ればご容赦の程を……

自分の作品を読み返してみて思ったのですが、やはり、起承転結が成ってないですね。

おまけに落ちもはつきりしてないし、次の作品こそ、もっとはつきりとしたテーマで、もっと楽しめる作品にしていこうと思います。

今回書いた中で、一番気に入っているのは、ヴィータにスポットを当てた回（第3話）です。

彼女の優しさが、読んでいて涙を誘う出来だったかと自負しています。

次回作は、もっと泣けて、笑えて楽しめる作品にしようかと思いい、構想中です。

読んで、応援して頂いた皆様、本当にありがとうございました。

B
Y
： 醉仙

【特別読み切り】ラルゴ15（前書き）

仕事人解散後も、未だに仕事人を辞められない男が居た。
コードネームをラルゴ15という。

【特別読み切り】ラルゴ15

仕事人組織解散後、ここにまだ一人仕事人を辞められない人物が居た。

名を、ヴァイスⅡグランセニツク、コードネームをラルゴ15（ラルゴファイフティーン）という。

彼は妹を失って以降、一度は仕事人組織に参加した物の、その後は単独で仕事を始めたのである。

何時しか、彼の名は闇の世界で1と2を争う凄腕の殺し屋として、驚異の狙撃者としてミッドチルダの裏社会に浸透していった。

彼の恐ろしさは、ただ仕事をするだけではない、嘘の依頼をした者はその金で依頼主を、間違った相手だった場合は、正しい相手を探し出して始末を付けていた。

それがどんな相手であろうとも、決して容赦することなく確実に仕留めていく、冷徹なプロの仕事であった。

管理局の中には、彼の素性を知る者もいるが、決してそれは口には出来ぬ秘密であった。

そんなある日の地上本部第18会議室、議題は「ラルゴ15対策」であった。

彼の名は最近有名に成りつつあったが、その名が知られる以前に、地上本部を狙撃した事が判っていた。

あの、オルネライア執務官狙撃事件である。

管理局の防衛機能はもはや地に落ちていた、これ以上地上本部や、関係幹部を狙撃されては、管理局の沽券に係わるからである。

「あなたはと思うの？ ルネッサ マグナス鑑識官」

「はっ、ターナー刑事部長、犯人は単独犯である事、魔力を持たないか、
持っていたとしてもCランク以下の極めて弱い魔力しか持っていないと思われます」

「何故そう思うのかしら？」

「レティ提督、それは犯行に使われているのが全て実弾銃である事、狙撃場所と特定された所から、残留魔力がほとんど検出されていない事です。」

もし、高町教導官や八神捜査官の様に強い魔力の持ち主でしたら、現場で測定器の針が振り切れるはずです」

「そうなると魔導師の線は薄いと言う事ね」

「ただ使われている弾丸が97番世界の物なので、その関係の人間である可能性が高いと思われます。」

それから、信じられないぐらいの腕をした狙撃手であるので、向こうに発見されたら逮捕所かこちらが死体に成りかねません」

そう、彼は狙撃不可能距離からの狙撃を成功させているプロなのだ。
だ。

「このクラナガンに97番世界の関係者はどのくらい居るのかしら

「？」

「推定ですが、およそ1万人程度かと思われます」

「そう、その程度ならそのうち捕まるでしょう？」

私の所からは人手は割けないわよ、まだ評議会派の捜査が山の様に残っているのだから」

「そうだそうだ！たまには休暇よこせ！」

と隅っこの方で、フェイト、はやて、ギンガの3人がわめいている。

この三ヶ月間、一月当たり三日しか休ませて貰っていないのだ。人使いの荒さでは、レティ提督は鬼だった。

「私がやります」

名乗りを上げたのはティアナだった。

「止めときい、駆け出しのひよっこじゃあ殺されるのが落ちやで」

はやてが窘める。

「そうです、あなたは狙撃者の恐ろしさを何にも判っていない」

ルネッサにもそう言われてしまった。

「そんなのやってみなけりゃあ判らないじゃないですか？」

「そんな甘い話ちゃうよー、プロの世界は」

「だったら、私の護衛に雇った中に銃火器のプロが居るから勝負してみるといいわ、その恐ろしさがよく分かるはずよ？
それから、ルネッサ・マグナス鑑識官、ティアナ執務官と組んでみないかしら？お互い学ぶ所は多いはずよ」

こうして、ルネッサとティアナはコンビを組む事になった。
以降、半年後に起こるマリアージュ事件まで、この腐れ縁は続く事になる。

二日後、廃棄都市区画

「こちらが私の護衛の一人で、マイケル・モーガンさん、元アメリカの大統領警護官、シークレットサービスの主任をしておられた方よ。」

今から1時間、あなた達と軽い模擬戦をして頂きます、彼は普段は拳銃を得意としているけれど、今日はライフル銃です。

「彼のペイント弾に当たればあなた達の負け、あなた達は彼に魔力弾かペイント弾を当てれば勝ちです。質問は？」

「一つ宜しいでしょうか？」

魔力弾以外にどんな魔法を使っても宜しいのでしょうか？」

「いいわよ、別に、どんな手を使った所で彼に勝てはしないのだから」

そして、マイケルがビル群の中にその姿を隠して5分、試合が開始された。

ティアナが、自分のデバイスを構えて路地を歩いていく、曲がり角まで来ると立ち止まってそっと曲がり角の向こうを覗く、同じ事を繰り返して3回目、僅かに顔を覗かせた瞬間、その額にペイント弾が撃ち込まれた。

だが、そのティアナは煙の様に消えてしまう。幻術によるダミーだった。

そう、ティアナは幻術で何人かのダミーを作り出していたのだ。そして銃声のした方へ徐々に包囲網を狭めていく、一方、ルネッサは慎重だった。

曲がり角の安全は手鏡で確かめて、一瞬で走り抜ける、時々後ろを振り向いて後方と上からの狙撃を警戒していた。

マイケルは思った、「こちらのお嬢さんは、相当戦場慣れしている」と。

だが彼女にも油断はあった、曲がり角など、建物の陰は気にしていた物の、窓などは警戒していなかったのだ。

そう、建物の反対側から、窓を通して狙われていたのだ。銃声がした時、彼女の頭にペイント弾が命中していた。

これで、ルネッサはリタイアした。
残るのは、ティアナだけだ。

マイケルは、いつの間にか建物の6階にいた、上から姿を隠しながら下の通りを観察していた。

「数が多いな、分身はこれだから厄介だ」

彼がそうこぼすのも無理はない、ティアナは幻術で少しずつ分身を増やしながら彼を捜していたのだ。

既に20人近くいる。

だが、彼もプロである、徐々にその弱点を見破りつつあった。

ティアナの分身には影がある、だが、その影が常に一定方向だったのだ。

如何にリアルに分身を作ろうと、リアルさにこだわるあまり影のコントロールまで気が回らなかった様だ。

スコープを通して観察すると、余計な物が見えない分、弱点を見つけやすいというメリットもある様だ。

彼がトリガーに指をかけ、ゆっくりと引き絞った。

銃声がした時、ティアナの額にペイント弾が命中していた。

ティアナは信じられなかっただろう、まさか幻術を見破られるとは思っていなかったのだから、だがそれが現実であった。

これがプロの世界、一度狙われたら決して逃げる事の出来ない恐ろしさである。

「痛った、ペイント弾で当たると結構痛いね」

「どう、これで判ったでしょ？その道のプロと戦う事が如何に危険かが？」

マイケルさんから見て二人はどう見えましたか？」

「まるで成ってないな、まず注意力不足、そして常に自分が狙われている事を自覚していない。」

これでは、いくつ命があつた所で足りないよ。

まあ、こちらのお嬢さんは随分戦場慣れしていたみたいだし、あちらのお嬢さんの分身というアイディアは決して悪くなかつた。

ただ……アレは切り札だつたんだろう？その切り札の効果がある内に、相手を仕留められなければ、やはり死ぬ事になる。
「まだまだ経験が足りないな」

二人には返す言葉もなかつた。

「それと、もう一つ、今の私では正確に当てられる距離は300mが限界だ。」

1km 狙撃を成功させると言う事は途方もない腕の持ち主だ。

今の二人ではと言うより、管理局で奴に近づける人間なんて多分居ないだろう、世界が違うんだ」

「世界が違う」言葉の重さは二人に伝わった様だ。

「さてと、まあラルゴの件は先送りという事で、あなた達には罰ゲームです」

連れて行かれたのは、フェイトの所だつた。

「あ、その書類お願いね」

二つの机の上に堆く積み上げられた書類の山、評議会派の取り調べ調書の山であった。

「締め切り期限は三日後の夕方だから、それまでお願いね」

調書を纏めるという仕事、しかも膨大な量である。

まさか、罰ゲームでこんな物が待っていていようとは思わなかっただろう。

本当の事を言えば、ティアナは少しでも早く手柄を立てて、少しでも出世したかっただけなのだ。

でも、いきなり躓いた、更にはこんな罰ゲームまで貰ってしまった……ルネッサも良い迷惑だった。

お互い、文句を言いながら書類を片付けていく、これが二人の日常になっていく切っ掛けだった。

同じ頃、108部隊隊舎

へりの整備を終えたヴァイスが、ナカジマ三佐達と雑談をしていた。

「時にお前さん、ラルゴ15つて聞いた事あるかい？」

ヴァイスは飲みかけていたお茶に思いっきりむせた。

まさか自分の事がいきなり話題に上がるうとは思っても見なかった。

「ま、まあ名前くらいなら何度か聞いていますがそれが何か？」

「何でも、物凄え狙撃の腕らしいな」

「そのようですね」

「どうだ、お前さんから見て奴はどう見える」

「止めて下さいよ、俺は150mにも満たない距離で外してるんですよ、それで妹の目を潰しちまった下手くそです。そんな俺と奴を、同列で見られても困ります」

彼の妹の話が出てしまった事に、ナカジマ三佐が済まなそうな顔をする。

「それもそうだ、いや、済まなかった」

これでラルゴの話題が終わってくれた事に、ほっと胸を撫で下ろすヴァイスだった。

仕事が終わると、ヴァイスはあるマンションに入っていく、ここは彼が偽名で借りている部屋だ。彼は仕事人になる以前から、趣味の部屋としてここを借りていた。今ではラルゴのアジトである。

彼の趣味は、バイクの部品を集めたり、ジップライターの収集、ミリタリーグッズの収集などであった。

特に、銃火器の収集に関しては並々ならぬ物があった。

彼はあらゆるルートで銃火器を収集していたのだ。

この部屋は、まるで博物館である。

いろんな機械部品や銃火器が所狭しとディスプレイされ、足下にはボルトやら訳の分からない部品があちこちに転がっていて、生活感を感じられなかった。

どうやら彼は、この部屋が一番落ち着く様だ。

彼は妹を失って以来、自宅には戻らない事が多かった。

既に自宅には待っている人など無く、帰ってもただ虚しいだけだった。

ただ、妹の思い出の詰まったあの家売り払う事も出来ずに今に至っている。

妹を失ったあの日、怒りと憎しみが彼の才能を開花させてしまった。

正確無比な狙撃の腕と、自分の気配や魔力すら消し去るという能力を。

元々彼はAクラスの魔導師である。

何かをしようとすればそれなりに残留魔力が発生するはずだが、それすら残さないという才能を同時に開花させてしまったのだ。

それ故に、ラルゴの正体が魔導師だとは誰にも気付かれないのである。

数日後の夕方、クラナガン中央駅西出口付近のチラシ配布用の棚

を、若い女が漁っていた。

ネットでようやく見つけたラルゴへの依頼の方法、それはこの棚の中に封筒があり、その指示に従えという物だった。

確かにあった、チラシの間に封筒が……中には紙が一枚、指示が書かれていた。

「西口を出たら左に曲がって三つ目の植え込みの中に封筒がある」

また封筒がある。

今度は地図だった、付近の簡略な地図に点線で道順と印が一つ、どおやら次の指示があるらしい。

目的地は路地を入った所だった。行き止まりの塀に打たれた釘に、使い捨ての通信端末が掛かっている。

彼女がそれを手に取ると、電話が掛かってくる。

「今あんたは、俺のスコープの中にいる」

ヴォイスチェンジャーを通した不気味な声がそう告げた。

「ラルゴなの？あなたがラルゴなのね」

「そうだ」

「あなたに依頼したい事があるの」

「依頼とは？」

「私の敵を取って欲しいの」

「どういう事だ？」

「私は、管理局の執務官です、これからある男を逮捕に行くのだけれど、もし、失敗したらその時は私の敵を取って下さい」

「お前死ぬつもりか？」

「死ぬつもりはないわ、でも、あいつのガードをしている奴が化物なのよ、どんなに殺しても死なない化け物、逃げるだけで精一杯だった」

「不死身の化け物だと？」

「そう、彼の会社が売り物にしている人間兵器、そんなに数は多くないのだけれど、極めてたちが悪いわ」

「ターゲットは誰だ？」

「E & M バイオテック社社長タラブーズ、専務取締役ソライア、兵器部門の営業課長ガルベネの3人よ」

「馬鹿な、あそこはただの製薬メーカーでそんな兵器とは関係がないだろう、それに兵器と関係があった部門は……」

「知ってるわ、仕事人に潰されたのよねえ？」

でも、その研究データを他の所へ持ち出していたのよ、それで別の世界で人間兵器を作っているわ、

それにあの会社は、他の2カ所の世界で、細菌兵器と毒ガス兵器まで製造しているの、尤もその2カ所は私が潰したけれど……

先週、本社をガサ入れをしたけれど、綺麗に証拠を隠滅された後だ

「たわ」

「なるほど、よく判った、受けよう、ただし金は先払いだ、指定口座を教える」

その口座は、ネットバンキングの使い捨て口座だった。振り込んだ瞬間、口座はどこかへ消えてしまった。こうして簡単には足が着かない様になっているのだ。

「しかしなあ、討ち漏らしがあったとは……」

「そう言う事で頼むよ、姉^{あね}さん」

「しかし、本当に下調べだけでいいんやね？」

「ああ、俺の受けた仕事だから」

はやての調査が進む、だが1週間後、彼に仕事を依頼したクリステイン＝メルロー執務官は変わり果てた姿で見つかった。そのあまりに酷い殺され方に、誰もが怒りを感じずには居られなかった。

「メルロー執務官は、弟がおったそうや、両親が離婚して弟と離ればなれになった。」

弟を連れて行った父親も8ヶ月前に事故死したそうや、そしてその

弟は、児童保護施設からあの研究所に送られて……」

「何てこった、それじゃあ弟の敵討ちもか？」

「そう言う事やね」

「あいつらは、三日後、新製品の発表レセプションでクラナガンにやってくる、会場はクラナガン中央グランドホテルの8階や、それとレティ提督から、あんたのガードと、その不死身の化け物を捕獲する様に依頼された、こっちの仕事は好きにやらせて貰うわ」

「ああ、好きにやってくれ」

三日後、レセプション会場

「えー当社の新製品の抗ガン剤について……」

長ったらしい説明が続いている。

その頃、会場を直接狙える3カ所にビルには、黒服サングラスの男達は何人も張り込んでいた。

こいつら全員、人間兵器である。

一方、ラルゴは正面のビルがブラインドとなる位置のビルの8階にいた。

この位置から、正面のビルを見ると、1カ所だけ、会場を見通せる

窓があった。

そう、ここから正面のビルのガラスを抜いて狙撃をするのである。距離にしておよそ400m彼にとってそんなに難しい距離ではない。

準備した銃は、ワルサーWA2000、5.56mm NATO弾仕様である。

（うんちく：ワルサーWA2000は、セミオートでありながらボルトアクション並の命中精度を誇る狙撃銃である）
スコープの先では、丁度彼らの挨拶が終わり、三人が主賓席に着いていた。

机の上に二脚を開いて銃を固定すると、まず社長からトリガーを引く、パン、パン、パン、パン、パン、パン、パン

一人当たり2発ずつ正確に放たれた弾丸は、彼らの額に全て命中していた。

僅か2秒ほどの出来事だった。

彼らは、油断していたのであろう、逃げる事も、避けて身を隠す間もなく、あっという間に殺された。
だが、それだけでは終わらなかった。

彼らが連れてきた人間兵器が、コントロールを失って変身し暴れ始めたのだ。

人間兵器達はそんなに頭が良くない様だ、今回言い渡されたのは、主人を守る事、3カ所のビルのいずれかにラルゴが現れたら殺す事、この二つだけだった、そのため次に何をしたらよいか判らなくなつて適当に暴れ始めたのだ。

一度はその場を離脱しようとしたラルゴだが、会場内にいた人間

兵器が他の客に手を出し始めたのを見て狙撃を続ける。
この人間兵器は、非常に厄介だった。

それまでの人の姿から、ひよる長いマネキンの様な姿に変わる、
それだけでなく身長も2.5m程になった。
真っ白なその姿に小さな黒い羽が生えていた。
大きい割りに意外と素早く、腕力、握力が普通じゃあない。

そう、彼女は、クリスティン・メルロー執務官は、殴られて動け
なくなつた所を体中握り潰されて死んだのだ。
まさに化け物だった。

レセプション会場は、地獄絵図に代わりつつあった。
その上、狙撃されても彼らは死なないのだ。

頭に弾丸を撃ち込まれようが、心臓を打ち抜かれようが死なない、
その傷さえ見ている間にふさがっていく。

業を煮やしたラルゴがフォローポイント弾を撃ち込んでみるが、
効き目は薄かった。

頭を半分吹っ飛ばされて、動きは多少鈍くなった物の、飛び散つた
頭部を拾い集めると、それがくつついて再生を始める。
このままでは、一般人の犠牲が増えるだけだった。

その時はやてから通信が入る。

「このままでは不味い、一般人の犠牲は出したくないし、顔を見ら
れる訳にもいかへん、どうしよう?」

「俺に考えがあります、もう少ししたら指示を出しますんで、それ
に従って下さい、奴らを廃棄都市区画の南ブロックに誘導します」

言うが早いか、ライフルをトランクケースにしまい込むと、エレベータでビルを下りていく、

玄関近くに止めてあった乗用車から、また通信を入れる。

「今からホテルの前を通過して廃棄都市区画の方へ逃げますから、奴らに俺を追いかける様指示を出してみて下さい、多分それで追いかけて来るはずです。

それから、もし追いつかれそうになったら、上空からの援護をお願いします」

乗用車は、2ブロック先から左に曲がるとホテルの前を通過した。

「ラルゴが逃げたぞ！追え！」

そう叫んだのは、ザファイラだった。

その声に反応して、会場にいた7体の内、再生中の1体を残して6体が地上に飛び降りてくる。

他のビルにいた奴らも、それに合流した。

全部で24体、かなりの早さで追いかけて来る。

そいつらを引き連れて、彼は逃げた。

はやて達が、その後ろを上空から追いかけていった。

一方、事件の知らせを聞いて、スバル達が救助に、ティアナが犯人逮捕に会場に到着したのはその1分後だった。

「なんだこいつは？」

現場に到着したスバルが発した第一声だった。目の前で大きなマネキンが、頭部を再生中だった。

主賓席に座ったまま3人が死亡している。何人かの出席者が重傷を負って倒れていた。

スバル、ティアナ、ルネッサ、ナンバーズ達がマネキンを囲む間に、他の隊員達が怪我人を運び出していく。

突然、マネキンが殴りかかってきた。

咄嗟に、ティアナが魔力弾をお見舞いするが、全く効いていなかった。

更に連射をするが、全てはじき飛ばされてしまう。

「振動拳！」

隙を突いてスバルが一撃お見舞いする、普通の人間はおろか猛獣でさえ首が折れるほどの一撃でも何の効果もなかった。

次の瞬間、ルネッサが銃を連射した。

彼女の銃は44口径である、至近距離から撃たれば、かなりのダメージがあるはずだ。

頭部に2発、胸に2発命中した物の、その傷もすぐに再生していく。

まさに不死身の化け物だった。

「これならどうだ！デイベインバスター！」

スバルが必殺の一撃をお見舞いするも、それさえあっさりと受け止められてしまった。

次の瞬間、マネキンが殴りかかってきた、スバルはそれをかわしたが、除けそこねたティアナが壁まで飛ばされる。

「不味い、肋が逝ったかも」

今のでティアナは肋骨を2本折っていた。

「これならどうだ！振動拳乱れ撃ち！
うおおおおおおお！！」

何百発という振動拳が、マネキンの全身を打ち抜いていく、そのうちにマネキンの全身にヒビが入り始めた。
そして、トドメの1発が鳩尾を打ち抜いた時、マネキンは突然爆発して砕け散った。

「どおやら、コントロールユニットが破壊されたようですね」

ルネッサが冷静に状況を観察していた。

一方、廃棄都市区画

「紫電一閃！」

シグナムが斬りつけるが、その剣が途中で止まる。

「何て硬い体してる」

その上、斬られた所がすぐに塞がっていく。

「ラケーテンハンマー」

その一撃をモロに受けても相手は倒れない。

その上、傷もすぐに塞がっていく。

「畜生、何て硬い皮膚をしてやがる、天狼拳が使えない」

「灰になりな！」

だが、その炎も通用しなかった。

「これならどおや」

シュベルトクロイツで斬り付けられた一体が石になって碎けた。
これは効くらしい。

「ギガントシュトラーク！」

ぺちゃんこに潰された1体も爆発して碎け散った。

ラルゴは、車から新しい銃を取り出していた。

ショットガンブルドッグ、ストックを外してピストルグリップを付けた取り回し重視のショットガンである。

弾丸はスラッグ弾、一撃で自動車のエンジンさえぶち抜く。

目の前の1体に一撃お見舞いする。

その1体は、胸に大きな穴が空いて動きを止めた。
どおやら再生に時間がかかる様だ。

その隙にリュックとショットガンを持ってその場を離れる。
リュックの中は、スラッグ弾とマガジンが10個、左脇のホルスターに入った拳銃用である。

先ほど大穴を開けられた1体に、リインが凍結魔法をかける。
完全に凍結したそれは、砕け散りはしなかったが、再生は止まり、完全に活動を停止した。

「はやてちゃん、1体確保ですう」

「ようやったでリイン」

それでも、まだ21体も残っている。

ラルゴは逃げながら考えていた、奴らの弱点を……

石化魔法は通じる、一定以上のダメージを受けると完全に再生するまで動きを止める、完全に潰されれば自爆して死ぬ。

という事は、体のどこかにコントロールユニットが有るはず、それを壊せば恐らく殺せるだろうと言うのが彼の結論だった。

その間に、はやてとヴィータがそれぞれ1体ずつ仕留めていた。

さっきは頭も胸もダメだった。

今度は、腹をぶち抜いてみた。

またしても動きを止める。

だが、彼は見逃さなかった、土手っ腹に空いた大きな穴の一番下の方、黄色く光る宝石の様な物が少しだけ見えていた。

すかさずその宝石に向けてもう一発放つ、今度は体にヒビが入り、爆発して砕け散った。

コントロールユニットは間違いなくその宝石だった。

「下っ腹だ！へその5センチ下を狙え！」

そう叫ぶ。

ヴィータは、ギガントシュトラークで、はやては石化で、シグナムはそのまま剣でへその下を突き刺す。

ラルゴはショットガンで下っ腹をぶち抜く。

それから10分、全てのマネキンが木っ端微塵に碎かれた。

「なるほど、これがその1体ですか……」

ここは第4技術開発局、マリエル技官、はやて、レティ提督、リインが見守る中で冷凍になった1体が分析されていた。

「やはり、人間の体をベースに作り替えられていますね、一体誰がこんな酷い事を……」

「クレイテン博士や、あの博士がしとつた研究成果がこれや、酷いもんやで」

「八神特別捜査官、フェイト執務官と共に今すぐE & Mバイオテック社本社及び関係先をガサ入れしなさい、人選はそちらに任せます」

レティ提督の指示が飛ぶ。

丁度そこへ、ティアナが病院から帰ってきた。

「良かったなあティアナ、シャルマルが担当で」

そう、あれから病院に直行したティアナは、すぐにシャルマル先生に見て貰えたのだ。

流石にシャルマルである、彼女の治療魔法は骨折程度なら1時間ほどで直してしまう。

彼女はあつという間に回復していたのだ。

「これは、この化け物は一体？」

「これか？ラルゴのおこぼれや」

「おこぼれて？どうやってたらこの化け物を捕まえる事が出来るんですか？」

「ラルゴが倒し損ねた1体を、リンが凍らせて捕獲したんや、ラルゴは12体ほど倒してどこかへ消えた、残りは私たちが倒したけどな、

たった1体に手こずっているあんたとラルゴとでは、そこまで大きな差があるって事や」

「そんな……」

確かにそれは大きな差だった。

どんなに努力しても埋めようのない大きな差、それは相手の弱点を見抜く能力、

一体どうしたらそんな力が身に付くのだろうか？

これが、経験値の差という物なのだろうか？とティアナは思い知らされた。

「じゃあ、私はこれからこいつを作った連中の所にガサ入れしてくる、フェイトちゃんも一緒や、

ティアナはその間書類を頼むわ」

フェイトが指揮を執って行われたガサ入れは、八神家、クロノ提督とその部下数名を加えてかなり厳しく行われた。

こうして、E & M バイオテック社の悪事は白日の下に晒された。

この会社で製造された人間兵器が、まだ紛争が続けている世界に売りさばかれていたのだ。

一方、裏社会では、不死身の化け物さえ倒す無敵の殺し屋としてラルゴの名前がまた大きくなっていた。

ラルゴ15、本名ヴァイス・グランセニック、ミッドチルダの闇に生きる孤高の狙撃手、最強の暗殺者である。

彼はどんな難しい依頼でも完遂する、己の銃の腕に賭けて。

ラルゴ15 完

おまけ：高町家では

その夜、フェイトが帰宅するとなのはは、映画を見ていた。ヴィヴィオが毛布を被ってガタガタ震えている。見ていた映画は「バタリアン」だ。

「なのは、相変わらずこういうの好きだね」

「あ、フェイトちゃんお帰り」

煎餅を摘みながら、映画を見ていたなのはが答える。

映画に目をやると、丁度切り落とされた手かもぞもぞ這っているシンだった。

「居るのよね〜こういうキモイの」

「え、居るのこんなの？」

「居るよ、さっきガサ入れしてきた会社、こう言うのを作っては売りさばいてたの、もう気持ち悪いなんてもんじゃないわ、いくら殺しても簡単には死なないし」

二人の会話にとうとうヴィヴィオが気を失ってしまった。

「あ、ヴィヴィオ大丈夫？」

ちよつとヴィヴィオには刺激が強すぎた様だ。

【特別読み切り】ラルゴ15（後書き）

いかがでしたか？

仕事人を含めて、いろいろと難しい事ばかりでした。

またどこかでお目にかかれたと思っています。

それから、ラルゴ15は、反響が良ければ、連載化するかも知れません。

お便りをお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7128/>

必殺仕事人 in ヴォルケンリッター

2011年7月31日17時59分発行